

---

# 塔の番人リゼル

myuz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

塔の番人リゼル

### 【Nコード】

N4904S

### 【作者名】

myuz

### 【あらすじ】

「マトウ」と呼ばれる地で塔の番をする少女、リゼルのものがたり。

作者は未熟者。

週1〜2回ペースになりました

制約は途中から消えました。詳しくは注意書き及びおしらせを御覧ください。

## ちゅうい

塔の番人リゼルを読む際には明るところで適度な距離で見てください。

この作品リゼルは0 52話において

ワード1ページ（フォントサイズ10・5）

台詞の前に名前がついている

で書かれていましたが、  
それ以降は

文字制限なし

台詞の前に名前は入らない

でかかれています（書くつもりです）

ギャップにご注意下さい。（？）

え？200字ひつようなの？ちょ、聞いてない。これ135字だつて！ああもう！

……修正中

……修正中

……修正中

よし。これで投稿できる。 それでは、塔の番人リゼル ごゆっくりどうぞ。

## ぶろろーぐ

霧を纏う、魔の島にある、魔の塔。

人々はそれらを「マトウ」と名づけた。

その塔は天に続くかと思う程に高く、太い。

マトウには多くの冒険者が訪れる。

塔には階毎に強力な魔獣が住まい、踏み入る冒険者へ牙を向ける。

しかし、その魔獣たちを倒し、進むことができれば、5階ごとに置かれている

宝箱の中身を得ることができる。

そしてなぜか宝箱の中身は毎日補充されていくのだ。

冒険者達は宝を求め、小数はソレを手にし、少数はあきらめ、他は散っていった。

そしてマトウから人は遠ざかっていった。

マトウには番人がいた。

彼女はマトウで大怪我をした。今生きているのは奇跡とも言える程の。

彼女は同じ事が起こらないよう、塔の番に就いた。

訪れる者が殆ど居なくとも、番を続けた。

マトウには三種類の意味がある。

塔の放つ霧が及ぶ地帯を「魔燈」

塔のある島を「魔島」

塔そのものを「魔塔」

マトウを訪れるものは物好きな少数の冒険者だけだ。

そして、魔燈にこられるのはその中の実力者だけ。

また、魔島を見つけ出すのはさらに少数。

最後に、番人の手により、魔塔に入ることのできる者は激減する。

番人の名はリゼル。猫獣人、17歳、♀。

武器は双円環<デュアルリング>

その実力は世界中に名を馳せた。

そして、人々の注目はまた、「マトウ」へと移っていった。

## ぶろろーぐ（後書き）

1話はワードで1ページ。  
感想とかあればうれしいです。

## 1 りぜる（前書き）

記念すべき第一話。もう後戻りは出来ない。

## 1 りぜる

リゼル「たあっ！」

当たり前だが、魔塔の番人は、魔島に住んでいる。

給料も無く、物資の支給も無い。そもそも管理人自体存在しないのだから。

リゼル「しとめたかな？」

幸いというべきか、魔島には魔獣が生息しており、それらを狩ることで生計を立てているのだ。

リゼル「大物♪大物♪」

肉は食用、その他は追いつ返した冒険者へのお土産にするなり食料と交換するなり。

彼女と取引するためだけにくる冒険者もいるのだが。

リゼル「お、お客さんだ。」

そして今日も魔島に人が訪れる。

リゼル「……不合格。」

魔術師「なっ……！」

リゼル「どうしてもというなら実力を。」

魔術師「ふっ、大魔術師の器、このサラフ」ネグレスが闘ってやるう！」

サラフと名乗った魔術師が僅かに詠唱し、魔法を放つ。

サラフ「舞い上がれ、ツインドラグブレス！」

かざした杖から炎と雷、二つの魔法弾が放たれる。

それを見てリゼルは武器である双円環を構え、一回転。

回転と同時に炎の魔法弾を円環の中に捕え、一見構えていなかった円環で

雷の魔法弾を受け、捕らえた。

サラフ「なっ!？」

リゼル「帰れ。」

自分の魔法が無傷で止められ、硬直しているサラフに向かって一言。そして円環を自分の前に浮かせ、二つの魔法弾を貫くように、手を突きだす。

炎雷の閃光がサラフの足元に着弾。瞬発的な力を生み出し、

大魔術師の器さんは空の彼方へお星様。

リゼル「ふう。最近、強い人こないなー。」

# 1 りぜる(後書き)

うひへ。

## 2 まとら（前書き）

予約投稿テストを兼ねて。

4 / 2 2 「がないのを修正。

## 2 まとら

リゼル「お、また誰かきたかな。」

魔燈全体に及ぶ霧は魔力を帯びている。

それは大規模な魔術すら通さない護りとなる。

魔燈に何者かが踏み入ると同時に、その魔力は僅かに揺らぐ。

番人である彼女以外は気づけないほどの、僅かな違い。

リゼル「お出迎えしなきゃね。」

ざばざば。

リゼル「……泳いできたのは、貴方が初めてかもしれない。」

槍使い「それは嬉しいかも。」

リゼル「うん……。そこそこ強いね。」

番人は自らの武器を構えて言う。

リゼル「貴方の実力、確かめさせてもらおう。」

槍使い「ちよつと認めてくれてるんだな。嬉しいぜ。」

なんか熱いなあ、ばやきつつもりゼルは回転して双円環で斬り付ける。

男は槍先を高速で動かして弾くと一気に踏み込む。

槍使い「連槍夢想・双爪燐奏！」

突き、袈裟斬り、薙ぎ、回転、様々な攻撃を少しの間も開けずに繰り出す連続攻撃

しかしリゼルはその全てを殺し、逸らし、躲わし、弾く。

10秒以上もその攻防は続く。集中力が先に切れたのは。

槍使い「くっ！」

リゼル「まだまだ！」

消えた。そう錯覚するほどの速さでリゼルは動く。

連続攻撃。1秒間に数十もの密度で攻撃は繰り返される。それは全方向から襲いかかる。

後、左、上、右斜後、前、前、後。

それを槍使いの男は直感と気配だけで捌く。が、追い付かない。

槍使い「っ……これは勝てねえ。」

槍が宙を舞う。

リゼル「貴方、名前は？」

槍使い「マトラだ。」

リゼル「そう。マトラ、合格。入っていいよ？ただし、無理なら逃げることに。」

マトラ「マジか。わかった。んじゃ明日にでも入る。宿、あるんだよね？」

リゼル「ボロだけどねー。」

久々の入塔者出現。

## 次の日

マトラ「一階の攻略も無理でした。」

リゼル「だろうね。」

## 2 まとら（後書き）

ルビふりしたかったけど出来なかった。  
漢字技は適当に音読みしてください。

### 3 そろん

リゼル「んー。最近多いなあ、お客さん。また来たよ」

マトラ「本読みながらよく分かるな。」

リゼル「10年も勤めてるんだよ？人生の半分以上。」

マトラ「7歳から番人してるってどんなだよ。」

リゼル「何で年しってんのさ。って、そうか、ガイドブックかー。」

マトウガイドブック。冒険者ガイドブックの中ではあまり売れていないほうだが、

これでもミリオンヒットしてたりする。

二刀流の人「君が番人リゼルか。」

リゼル「そうだね。んー、貴方合格ね。」

マトラ「マジか。」

二刀流の人「ん。嬉しいが、君と手合わせを願いたい。塔に入る前にね。」

リゼル「いいけど、手合わせするなら入るのは明日以降ね。」

門番との戦闘をした場合、疲労を考えて当日の入塔は禁止。

ガイドブックの第3項、注意事項にかかれている。

二刀流の人「……了解。では、ソロン＝シグナリア、推して参る！」

リゼル「番人リゼル、受けて立ちましょう！」

瞬間的に交差し、金属音が響く。リゼルが一瞬止まる。

そして独楽の如く回転しながらソロンへ襲いかかった。

ソロンは回転の方向に合わせて切り上げて軌道を逸らす。

そのままリゼルへ前後左右、上下すら異なる変則連続攻撃を繰り出す。

回転の勢いを緩めながらリゼルは流れる様な動きで攻撃を防ぎ、一本の剣を弾いた。

距離をとったリゼル、円環の一つを投げつけ、もう一つの円環を自分の目の前へ

浮上させる。彼女が円環の中を撃ち抜く様に手を突き出すと。魔術式が展開された。

無数の魔法弾がソロンへ襲いかかる。だが、ソロンは全てを叩き切り、消していく。

その状態が数秒続いた後、勝敗は決した。リゼルが最初に放り投げた円環が孤を描き、

ソロンの剣を後ろから弾き飛ばしたのだ。ソロンは数十発程被弾し、膝をついた。

ソロン「勝てないな……これは」

苦笑するソロンにマトラが手を伸べる

マトラ「明日は一緒に入ろうぜ？」

ソロン「……おうよ。」

リゼル「さて、今日は猪鍋かな？」

魔法弾の流れ弾で仕留めた魔獣を見て、笑った。

## 次の日

ソロン「2階までクリアしたぞ！」

リゼル「おー。……私も11年ぶりに入ってみようかな？」

マトラソロン「「え。」」

### 3 そろん（後書き）

リゼルは気まぐれ。

#### 4 いざ！（前書き）

アクセス解析を初めて使いました。  
見てくれる人いるんですね。頑張ろう。

#### 4 いざ！

リゼル「前回行ったときは25階だったかな？」

ソロン「そりゃー、勝てないわな。」

さりげなく実力差を実感させられてソロンが落ち込む。

マトラ「でも番人自ら入るなんて大丈夫なのか？」

リゼル「公認組織じゃないからねー。とにかく、いくぞー！」

ソロン「あー、まってくれ。」

そう言つてソロンが手帳を取り出す。

ソロン「こんな珍しい事ないからな、メモくらいいいだろ？」

リゼル「まあ、構わないけど。……こんな時にまたあいつか……」

ソロン「ん？また？」

リゼル「何回も来てる魔術師だと思う。弱いつていうか……技術がない。」

マトラ「可哀想だな、そいつ。」

話しているところに魔術師が到着。リゼルに鋭い視線を向けながら、小声で詠唱している。

ソロン「あー。確かに向いてないな。」

マトラ「俺でも勝てる気がするぞ。」

リゼル「と、いうわけで。お引き取りください。」

サラフ「ふざけるな！救世となる光よ！シャイニングブラスター！」  
直径5m以上もの極太レーザー！リゼルは一切動じずに、無詠唱で全く同じ魔法を放つ。

サラフの光は一瞬で飲み込まれ、光とともに魔術師はマトウの外まで飛んで行く。

ソロン「うわぁ……容赦ねえな……」

マトラ「同じ魔法をわざと後出しされて負けたんだ、しばらくは立ち直れないだろうな」

リゼル「一番最初は反射してあげたし、先月は全部防いで魔力切れ

待ってあげたし、

その前だつて武器使わないであげたし……ねえ？また来ると思うなあ……」

リゼルはさらつと言ったが、あまりにも酷い仕打ちである。

ソロン「まあ……とりあえず、塔入るか？」

リゼル「いんやー。立ち入り禁止にしまして明日いこう。」

マトラ「万全で挑むつか。大して疲れてなさそうだけだな。」

そんなことをいいながらソロンの持ってきた焼肉セットで晚餐を楽しんだりリゼル達は魔島の結界装置を起動させて普通に寝た。

#### 4 いざ！（後書き）

おまけ

リゼル「塔の中でも寝なきゃいけないと思うからソロン食料持ってきてね。」

ソロン「俺が奢るのかよ！」

マトラ「リゼルはいつも当日調達してるから無理だとき。俺も泳いできた時落とした。」

ソロン「お前らよく生きてこれたな……」

## 5 がるむ（前書き）

おまけも合わせて1ページ。

## 5 がるむ

魔塔の1Fには魔獣ガルムがいる。

巨大な体から繰り出される攻撃は冒険者を一撃で沈め、その口から放たれるブレスは部屋中を埋め尽くす。

そしてその魔獣に挑む者がまた……

リゼル「おー でかくなつたなー！」

マトラ「ん？」

リゼル「むかしはこいつも半分くらいの大きさだつたんだよー」

ソロン「じゃあ日に日に難しくなってるってことか？この塔。」

マトラ「それよりも、寿命がきたときが気になるんだが。」

リゼル「ああ、それならこの塔に転生魔法がかかつてるから。

魔物がやられたら復活、寿命がきたら転生するみたい。

4年前わかったことだけだね。」

マトラ「ほへー。よくわからんが楽はできないんだな。」

リゼル「さあねえ。んじゃいくよー！」

リゼルが双円環を構えて戦闘態勢をとる。マトラも槍を、ソロンは刀を構える。

ブレスを吐くガルム。しかしブレスはリゼルの投げた円環に切り裂かれて消滅する。

今更だが双円環はチャクラムでは無い。魔力で起動を操作するため、不規則な軌道にする事も可能だ。現にリゼルの投げた円環はガルムの目前に停滞している。

リゼル「たあっ！」

それを足場に、ガルムの頭上まで飛びあがるリゼル。

そしてそのまま重力魔法をかけた全体重で飛び蹴り……もとい踏みつけを放つ。

ガルム「……きゆう。」

ソロン「一撃かよ…… お前に勝負挑んだ俺が馬鹿みたいに思えてき

た……。」「

マトラ「なありゼル。俺ら何Fから武器構える?。」

リゼル「危なくなったらでいいと思うよ?とりあえず17、8Fくらいからじゃない?。」

マトラ「だってよ?ソロン。」「

この後もさくつとりゼルが片付けまくった為、一日で10Fまで進んだそうです。

## 5 がるむ（後書き）

―おまけ―

マトラ「すげー。マジックアイテム一杯あるぜー！」

リゼル「10Fの宝箱だとこんなもんかな。5Fはもっと微妙だったでしょ？」

ソロン「いやしかし……これを全て売れば相当な額だろうな。」

リゼル「まあ質はいいとも言えないけどね。10Fだから仕方ない。」

マトラ&ソロン「質が良くないって……これで？」か？

宝箱を放置しようとしたリゼルを必死で引き留めて、

中のマジックアイテムを回収するマトラとソロンだった。

## 6 ごと！

リゼル「ていや！」

サイクロプスをたおした！

リゼル「とー！」

ウイスプをたおした！

リゼル「やー！」

フェンリルをたおした！

リゼル「てい！やあつ！」

グリフォンをたおした！

リゼル「はっ！てい！せい！やー！」

オーガをたおした！

――15F・宝箱の間

そんなわけで、快調に進んでいったリゼル一行は、とっかかりリゼル「宝箱を漁りながら相談をしていた。」

リゼル「さすがに一撃じゃ仕留められなくなってきたねー。」

マトラ「ここまで一撃だったのがおかしいって……」

ソロン「そもそも蹴り技だけでここまで来るのがおかしい。」

リゼル「あ、マトラー。この槍使えば？今のより性能いいんじゃない？」

マトラ「ちょ、これすげえ！もらっていいのか！？」

リゼル「使わないし。ソロンのはないねー。」

ソロン「それは別にいいとして、この先は私達も戦闘に参加しよう。」

リゼル「そだね、マトラはヘイト取り、ソロンはバックアップお願い。」

マトラ「分かった。攻撃力全部防御に回す。」

ソロン「よし、めばしいものはとつたな。」

リゼル「いこつか！」

――16F

リゼル「そつか。16Fはこの子か。」

対峙しているのはレイス。物理攻撃の通りにくい厄介者。霊体だけど一応触れる。

マトラ「ディフェンススタンス！パリイモード移行！」

リゼル「詠唱します！ソロン、カバーお願い！」

レイスの攻撃を弾いて受け流していくマトラ。ソロンは魔力をばら撒いて

詠唱の探知をジャミングする。そして……

リゼル「……更なる力を以て是を討て！『シャイニングステイグマ』

！」

光が、部屋中を覆いくつす。

……・マトラとソロンも巻き込んで。

リゼル「……やりすぎた。ごめん。」

マトラとソロン負傷のため16Fでキャンプしました。

## 6 ごー！（後書き）

塔の構造についての番外解説とか書かないといけないかなあ。

## 7 ぱりい

――17F

マトラ「おらおらー！パリイ！パリイ！パリイイイ！」

リゼル「……永遠の夜と共に在れ。『コキユートスコフィン！』」  
ぴきぴきぴき、こちーん。

ソロン「……終わったか。おいマトラ、叫んでヘイトを稼ぐのはいいが、うるさい。」

ちなみにヘイト……とは、冒険者用語でモンスターの敵対心の事を表す。

叫ぶ、攻撃を与える。詠唱を始める、めだつ等の行動で増えるとさ  
れ、

自分のヘイトを増やし敵の意識を自分に集中させるのがマトラの役  
目である。

マトラ「パリイモードで構えてるんだから派手な技撃てないし、仕  
方ないぜ！」

リゼル「まあ、気にしてても仕方ないよ。私の詠唱に影響はないか  
ら。」

ソロン「ならいいんだがな。敵も強くなってきた、油断するなよ。」  
――18F

そこには3本の尻尾を持つ巨大狐が座っていた。

リゼル「あちゃー。トライテイルだっけか。」

マトラ「まずいのか？」

リゼル「ちよつと武器の相性が悪い。魔法も効きにくいから……ソ  
ロンが火力ね！」

ソロン「……無理じゃないか？」

リゼル「バックアップはするから！いけ！」

無理やりソロンを前に立たせるリゼル。ソロンは仕方なく二本の刀  
を抜く。

マトラが槍を構えたのをみて、トライテイルも戦闘態勢に入った。  
リゼル「深淵よ……『プロテクション』！、大地よ……『ストレン  
グスー！』」

マトラ「サンキュー！おら、パリイ！」

ソロン「紅龍・朧！紫龍・翳！輝龍・翔！璃龍・虚！」

マトラ「パリイイイ！」

リゼル「何でこの人たちいちいち技名を叫ぶんだろう。……流行つ  
てるのかな？」

そんな事をつぶやいているリゼルの目に、ある攻撃が写った。一見、  
尻尾でのなぎ払い。

その先にはマトラ。槍を構えてパリイの姿勢をとっている。

リゼル「ディ、……『ディスプレイ』！」

マトラ「パリイ！」

攻撃を弾かれたトライテイルが姿勢を崩す。

ソロン「万龍一閃！」

七色の剣閃が走り、トライテイルは力なく倒れこんだ。

マトラ「よっしゃあ！……って、リゼル？」

リゼル「……………」

ばたつ。

マトラ＆ソロン「……………リゼル！！！」

## 7 ぱりい（後書き）

少しずつ伸びて嬉しいです。  
今更ながらソロンの技が中二。

紅龍・朧くくりゅう・おぼろ  
紫龍・翳くしりゅう・かげり  
輝龍・翔くきりゅう・かける  
璃龍・虚くりりゅう・うつろ

・・・こんなん読めるかつ。

## 8 まぼー（前書き）

PV450&amp;ユニーク100達成しました！

自慢できることがどうかありませんが、これからも頑張ります！

## 8 まほー

マトラ「どうしたんだ!？」

ソロン「落ち着け。スクワットしても意味ないだろ。」

パニック状態のマトラをなだめて、ソロンが詠唱を始める。

ソロン「万物よ、我にその英知を授け給え。全ての息吹を報せ給え。  
『ディテクト』!」

ディテクト。探査魔法と呼ばれる魔法の一種である。そのなかでもディテクトは、

体の肉体的な不調、建築物の欠損などの調査に適した魔法である。

マトラ「・・・どうなんだ?」

ソロン「肉体的なダメージは無いみたいだな。となると・・・」

マトラ「魔力の枯渇・・・位しか思いつかないな。」

ソロン「枯渇する程の魔法を?・・・あ!」

マトラ「なんか使ってたかの?」

ソロン「・・・恐らく無詠唱ディスプレイだな。」

マトラ「あれ、ディスプレイって中級魔法だよな。」

ソロン「そうだ。もともと魔力消費の高いディスプレイだ。それを無詠唱となると・・・」

マトラ「・・・俺には想像もつかないな・・・」

二人がとりあえず魔力薬（粉）をリゼルにひたすらかけまくった。そして20分後。

リゼル「んう・・・」

マトラ「おはよう。」

ソロン「やっと起きたか。」

リゼル「ああ、ごめん。倒れちゃったんだね。ってなにこれ・・・  
粉まみれだ。」っ

マトラ「なんで無茶したんだよ。無詠唱ディスプレイって。」

リゼル「無茶はどっちだか。あの攻撃そのままパライなんてしてた

らどうなったか分かる？」

ソロン「何かあったのか？」

リゼル「インパルスアタック。知ってるかな、パリイ殺しって呼ばれてる魔法技術。」

ソロン「聞いた覚えがないな。」

マトラ「なにそれ？」

リゼル「やってみたほうが早いね。この槍つかって。」

リゼル「から槍を受け取ってパリイの構えをとるマトラ。」

マトラ「よし、来い！」

リゼル「やあっ！」

マトラ「パリイ！」

バチィッ！

リゼル「と、このように武器を破壊すると同時に麻痺させることができます。」

ソロン「実際にやる必要あったのか・・・？」

反動で吹っ飛びつつ麻痺って動けないマトラの為にこの日はキャンブしました。

## 8 まほう（後書き）

つづく。

## 9 こねむ（前書き）

風邪気味。

## 9 これむ

19F―

マトラ「あと2匹でアイテムゲットオオ！」

リゼル「このメンバーでたどりつけるかなあ。」

ソロン「あれ、リゼルは25Fまでいったんだよな？」

リゼル「一人で挑んだわけじゃないよ。前よりは強くなってる自信はあるんだけどね。」

マトラ「俺らがしつかりしないとだめってことだな。よっしゃこいつ！！」

―クロムゴーレムが現れた！

ソロン「来るぞっ！」

マトラ「パライ入るぜ！」

リゼル「前衛入ります、畳みかけて！」

ソロン「了解っ瞬影k……」

バキッ！

ソロン「剣がつ！？」

リゼル「ああもう！『ライトニングプロテクション』！」

ソロンに襲いかかるクロムゴーレムの巨大な腕は、稲妻の壁に阻まれる。

ソロン「……っ！すまない、下がって援護に回る！」

リゼル「了解っ！」

マトラ「リゼル！危な・・」

バシッ！

マトラ「……へ？」

クロムゴーレムのハンマーフィスト。

それは確かにリゼルの後頭部を捉えた。なのに、弾かれた。

リゼル「ソロン、金属系ゴーレムとの戦い方、よく見ておいて。」

イグニス・ウエポン』」

双円環を手に、リゼルが戦場を舞う。

円環は赤く輝き、幾つもの斬撃の痕がゴーレムの至る所に刻まれる。対するクロムゴーレムも必死に身体を回転させ攻撃するが、リゼルにダメージは届かない。

リゼル「全てと共に凍れ。悠久と共に去れ。永遠の夜と共に在れ。

『コキユートスコフィン』」

ピキピキと音を立てて、ゴーレムのあちこちに氷がついていく。そして――

リゼル「ブレイクツッ!!!」

刃が閃く。それだけで氷と共にクロムゴーレムは粉々に砕け散っていった。

ソロン「……熱疲労か。それに攻撃を弾いていたのは、磁力か？」

リゼル「最初の電撃にちよつと細工をね。それより次の階で、武器みつかるといいね!」

ソロン「あ、……武器……。」

がつくりと頂垂れるソロンをひきずって、リゼル達は20Fへと足を運んだ。

## 9 これむ（後書き）

—おまけ？—

マトラ「俺テラ空気。」

## 10 しれん

―20F

マトラ「あれ、宝箱じゃん。」

ソロン「敵はいないのか？」

リゼル「あーごめん、マトラ、ソロン。この20Fは、特別なんだ。」

マトラ&ソロン「ん？」「」

リゼル「この敵…ダークナイトとはね、1VS1でしか戦えないの。」

たえパーティーを組んで入ったとしても、個々の実力を試される場所。」

マトラ「なんてこつたい。」

ソロン「それじゃ、一人じゃ2Fも突破できない俺たちじゃ無理だな。」

リゼル「ただし、ここだけは戦闘の前に宝箱の間に寄れるようになって、

ここで回収して引き返す人も多いんだ。私達も今回はココで引き返そう。」

ソロン「折角ココまできたんだがな……ん？まてよ……」

マトラ「おお！この鎧もらっぜ！」

リゼル「やっぱいいものそろってるねえ。この階層になると。」

ソロン「……。」

―1時間後

リゼル「よし、帰ろう！」

ソロン「……それでいいのか？」

リゼル「？」

ソロン「番人ともあろう者が20Fで撤退。そうともなれば。」

マトラ「なれば？」

ソロン「これから挑む者達はこの先に進もうとしなくなる。」

リゼル「？……あー！」

ソロン「帰るならせめて、お前がそいつを倒してからだ。後は様子見とでも言えればいい。」

リゼル「うーん。あいつに会いたくないんだけどなあ。」

マトラ「会いたくないって……そのダークナイトって、変なやつなのか？」

リゼル「いやー、目の敵にされてて。私って卑怯だし。」

マトラ「騎士つてくらいだから正直者なのか。」

リゼル「真正面から技比べしようとしてくるんだ。遊び心で

分身して、全方位攻撃浴びせて、地中から奇襲したら、キレられた。」

ソロン「……俺はそいつに同情する。」

マトラ「でもココで帰ったら次もつとキレるぜ。俺だったら。」

リゼル「あーあ。どうしよう。」

## 10 しれん（後書き）

—おまけ—

会話だけで話終了したから地の文を入れてみる。  
リゼル「なにしてんのさ。」

## 11 ばとる（前書き）

ワード1ページの制限がつかくなる時期。

## 11 ばとる

リゼル「久しぶり。だーくないと、さん。」

黒騎士「ったく、10年ぶりとは随分とサボったじゃねーの。この不良猫が。」

視線がぶつかり、周囲に火花が散る。

マトラ「騎士の方は槍つかってんじゃねーか！参考にしよう……。」

ソロン「お前の両手槍とは違う。見る、奴は盾も持つてるだろう。」

マトラ「あ、そうか。……で、お前は何をメモってるんだよ。」

ソロン「道中のモンスターのメモをしている。黒騎士にもいつか挑みたいものだ。」

普通に雑談している二人をみてリゼルはぼやく。

リゼル「あーあ、やりたくないなあ。」

黒騎士「10勝11敗、おめーに勝ち逃げされてたまるか。」

リゼル「はいはい、じゃあやりましたようか。」

お互いが武器を構え、睨み合いが始まる。先に動いたのは……

リゼル「！！」

黒の甲冑に身を包む騎士、ダークナイト。

黒騎士「おらおらあ！」

リゼル「相変わらず、力押ししかないんだね、単細胞さん。」

ダークナイトの左手は、驚異的な速さで突き出され、それを上回る速度で引き戻される。

その手に持つ槍を、リゼルはピンポイントで魔力を乗せた円環で防いでゆく。

神速の突きの一つが、防がれずに、逸れる。リゼルはそこにカウンターを放つ。

リゼル「次は私の番だね！」

黒騎士「ちっ……」

ダークナイトの盾へ、無数の衝撃が走る。

リゼルは流れるような動きで、攻撃を続ける。金属がぶつかり合い、音を立てる。

一方、それをモニター室から眺めているマトラ達は、実にまったりしていた。

マトラ「リゼル、何で正面から攻撃してんだ？俺らの時みたく色々な方向から……」

ソロン「いや、横から攻撃したら反撃が入る。それほどまでにあの騎士は、強い。」

マトラ「ほへー。しかし、盾持ちの相手にずっと攻撃してどうすんだ。」

ソロン「盾は受け止めるだけじゃダメだ。近接攻撃に対してはパリイをする。」

マトラ「え？俺が槍でやってるやつ？攻撃弾くあのパリイ？」

ソロン「盾の場合は、相手に衝撃を与えて体勢を崩す事が出来るんだ。」

マトラ「え、じゃありゼル不利じゃん。攻めてても不利なのか？」

ソロン「いや、リゼルは所々インパルスアタックを混ぜている。」

マトラ「あれかー……つまり奴はそれだけはパリイしないように戦ってるって事か。」

ソロン「そうだな。重心、遠心力、魔力、どの扱いも俺らじゃ到底敵わない……」

一際大きな金属音の後、リゼルとダークナイトがお互いに距離を取る。

戦いは、まだまだ終わらない。

# 11 ばとる（後書き）

ちよつと続く。

## 12 つづき(前書き)

サブタイを3文字で決めるのは鬼門。

同日20時43分 語尾、誤字等を修正しました。

## 12 つづき

黒騎士「前より速くなってやがる。うざってえ……」

リゼル「珍しい。貴方から距離を取ってくるなんて。」

黒騎士「何時までも遠距離が苦手だと思うなよ！おら！」

ダークナイトが空中に何かを投げ、盾を掲げる。

黒騎士「『シャドウプロテクション』！」

リゼル「防御魔法……？魔法を使えるようになったんだ。単細胞から進化したんだね。」

黒騎士「ほざけ。これで貴様の魔法なんざ効かねーよ。」

リゼル「安い挑発。でも、特別に乗ってあげる。『サンダーショット』！」

電撃がダークナイトを襲う。が、ソレは魔力を宿した盾に阻まれる。盾にぶつかった電撃はその進行方向を変え、リゼルへと襲いかかる。リゼル「反射、か。その魔法、どのくらいまで耐えられるんだろうね。」

電撃を避けながら、リゼルは言い放つ。

黒騎士「ふつ、安い挑発はてめえじゃねーか。てめえはもう俺を倒せねーよ。」

リゼル「猛る炎、静かなる舞。煌け、その息吹と共に。『バーニングランス』！」

黒騎士「無駄無駄。俺はお前の為にこの魔法を開発したんだぜ。」

跳ね返る紅蓮の炎を避けて、リゼルがダークナイトの正面に立つ。

リゼル「貴方が開発したんだ。どうりで適当な魔法な訳だ。今ので分かったけど、

所詮はただのトリック。分かっしまえば破壊は簡単。そうは思わない？」

黒騎士「もう見破ったか、流石じゃねーか。でもよ、空間毎攻撃を反転させるんだ

タネが分かったくらいで破壊できるような物じゃねーよ、バーカバーカ！」

その言葉を聞いたリゼルは、ニヤリと笑う。

リゼル「自分からタネ明かししてくれて助かったよ。おかげで破壊できる。」

黒騎士「なっ!？」

リゼル「猛る炎、静かなる舞。煌け、その息吹と共に――」

詠唱するリゼルの右手へと炎が収束する。それは先程放った紅蓮の炎。

黒騎士「……さっきと同じ魔法じゃねーか!ハツタリ猫が!」

リゼル「さあて、どうか。『サンダーボール』。」

突如左手から3つの雷の球が放たれる。

黒騎士「また不意打ちか!」

魔力の宿る盾を突き出すダークナイト。雷が当たった瞬間、その魔力が、弾ける。

黒騎士「なっ……!」

リゼル「『バーニングランス』!ついでに『ウィンドショット』!」

紅蓮の炎が盾もろともダークナイトを飲み込む。追撃の風弾が炎を強めて爆散させる。

黒騎士「……てめえ……どう……やっ、て……。」

がくりと崩れ落ちるダークナイト。勝者、リゼル。

リゼル「魔法つかえても馬鹿のまんまだったね!」

## 12 つづき（後書き）

戦闘描写苦手だ…

リゼルのキャラ崩壊暴走はこのへんまで。

### 13 きかん（前書き）

タイトルの半角スペースを全角に修正。 4 / 26

### 13 きかん

マトラ「おつかれさん、リゼル。」

ソロン「見事なハッタ…作戦勝ちだったな。」

リゼル「今回は楽だったな。真正面からやってたらどれほど苦戦してたか。」

ソロン「確かに近接戦は拮抗していたな。」

リゼル「んじゃ、かえろつか。」

マトラ「うおー！ベッドでねるぞー！」

魔塔には帰還装置がある。各階に一つあるが、装置は隠されていて、高階層になるほど見つけにくくなっている。

しかし、場所が変わらないので知ってさえいれば何の問題もない。

リゼル「えーと確か……ほい、ここ。」

リゼルがひとつだけ模様が僅かに違うタイルをはがすと、転送魔方阵が隠されていた。

ソロン「ほう。面白いな。」

マトラ「ありきたりだなー。」

リゼル「はいはい、無駄口たたかない。んじゃ、『エスケープ』！」  
魔方阵から光の柱が発生し、3人を包み込んだ。

―塔入口

リゼル達は出発の前、結界装置を作動させていた。

その結界には、ある程度の実力がないと入る事ができない。

魔塔で言うならば5Fを達成できるのが最低ラインだろう。  
にも関わらず、そこは人で溢れていた。

リゼル「え？ちよっ、なんでこんなに人が……」

冒険者「わいわいがやがや。」

マトラ「よし、ソロン。騒ぎになる前に逃げるぞっ！」

ソロン「了解っ！光よ、我らを不可視の存在と化せ！」ステルス！」

「

リゼル「あ、二人共っ！？……ああもう。それにしても……なにがあつたのこれ……。」

???「リゼルさん、ごめんなさい。私のせいです……。」

呆然としているリゼルの後ろから、声がかかる。リゼルが振り返ると、

そこには僅かに年下くらいと思われる羊獣人の女の子が申し訳なさそうに立っていた。

リゼル「貴方は……？」

女の子「とりあえず場所を移したいです。こっちです。」

ざくざくと獣道を歩いて行く女の子。

リゼル「あ、ちよっとっ！」

二つの影は森の奥へと消えてゆく。

# 13 きかん（後書き）

いまさら新キャラ。

14 まとう（前書き）

一段落。

## 14 まとう

魔島の森の中を、猫と羊、二人の獣人が進んでいた。

女の子「……このへんで大丈夫です。」

リゼル「えつと、じゃあ、説明してもらえるのかな？」

女の子「はい。まず私は、守護騎士<ガードナイト>のミリア＝ロセクトです。」

私がここに来たのは、遺跡探査の依頼があったからです。」

リゼル「遺跡探査って言うと、魔塔？」

ミリア「当初の目的はそうだったです。依頼は結界が張られていたので、結界に一時的な穴をあけて通らせてほしい、との内容です。それで二日前に到着したので。」

昨日、リゼルさんが帰ってくるまで魔塔調査を見送って、その間地質調査を

することになったのです。結論を言うと、ここで地下遺跡が見つかったです。」

リゼル「遺跡！……それってどのくらいの規模？」

ミリア「かなり大きいです。北の大迷宮とまではいきませんが、ダンジョンらしいです。」

リゼル「成程、それでこんなに人が集まったのか。」

ミリア「でもまだ入り方がわかってないのです。なので魔塔も調査したいのです。」

それで、内部の調査の際、リゼルさんにも手伝ってもらいたいです。」

リゼル「断る理由もないし……わかった、手伝うよ。」

ミリア「ありがとうなのです！よろしくです、リゼルさん。」

リゼル「円環使い<リングマスター>のリゼルです。よろしく。」

一か月後

その後、魔塔及びその周辺調査が行われた。

結果として、地下遺跡と魔塔になんらかの魔道リンクがつながっている事がある。

判明。地下遺跡への道を切り開くため、冒険者達が魔塔へ挑んだ。あまりの人数にリゼルが選定するのは難しく、冒険者ギルドがその役目を担った。

人数こそ膨大だったものの、実力者は少なく、入れるのは少数。さらにその殆どが低階層で引き返してきた。

人々は憤った。遺跡があるにもかかわらず、調査できない。冒険できない。と。

ギルドからの依頼により、リゼルは魔塔攻略の全面的に任される。彼女は再び番人を始める。

魔塔へ挑む資格を確かめる為に。己の過ちを繰り返さない為に。

彼女は今日も番人を続ける。

塔へと挑む仲間を探す為に。

リゼル「お、また人が来た」

## 14 まとう（後書き）

これで番人リゼルのものがたりは終了です。なんて  
言つとでもおもつたかつ！！！！

終わりません。

第一章が終わつただけです。

第二章の投下まで時間がかかるかも知れません。

## 第一章 登場人物紹介（前書き）

第一章を観終わった人のみご覧ください。  
ネタバレやメタ発言を含む可能性があります。

## 第一章 登場人物紹介

リゼル「ご無沙汰、リゼルです。」

マトラ「マトラだぜっ」

ソロン「いちいち名乗らずとも台詞の前に書かれているだろう。」

ミリア「そこ、野暮な事言うなです。」

サラフ「私も来てやったぞ。」

リゼル「はいはい。んじゃさっそく登場人物紹介だよ。」

ソロン「ついでに今まで使った技の解説もいれていくぞ。」

マトラ「それはなしになったな。」

ソロン「そうなのか？」

ミリア「そうらしいです。」

リゼル（17） 猫獣人 ♀

職業： 円環使い<リングマスター>

武器： 双円環<デュアルリング>

好きなもの： 食べ物

嫌いなもの： 面倒事

備考： 7歳の頃から魔塔の番人をしている。

その頃から25Fまで進む程の実力者である（5人パーティー時）

毎日の食事は来訪者からの買い付けや魔物狩り。

朝の鍛錬は欠かさず、真面目に見えて結構適当。気まぐれ。

サラフⅡネグレス（32） 人間 ♂

職業： 魔術師

武器： 両手杖

好きなもの： 魔法・魔術

嫌いなもの： 見下される事

備考： 魔法大好きな魔術師。自称「大魔術師の器」

魔法をメインに戦うが、魔術も使える。魔術師と名乗っているのは

「魔法使い」より恰好よく聞こえるから。という失礼な理由。

パーティーの一員としては強いが、個人での戦闘能力は低い。

マトラ (21) 犬獣人 ♂

職業： 槍使い

武器： 両手槍

好きなもの： 激しい事

嫌いなもの： 徹夜

備考： 初・魔島に泳いでやってきた冒険者。

槍捌きはいまいちだが、スピードはなかなかのもの。

テンションが高い事が多く、台詞に「！」が多い。あとうるさい。

ソロン＝シグナリア (30) 人間 ♂

職業： 双刀魔導師<ソーサリーブレイバー>

武器： 刀×2

好きなもの： 強い者

嫌いなもの： 馬鹿

備考： いろんなところで決闘を挑んでは負ける事で有名な人。

だが、観察力は確かで、負けながらも技術を盗んでいる。しかし、自分で編み出した技のネーミングセンスは微妙。オールラウンダーで、サポートを得意とする。

ミリア＝ロロセクト (22) 羊獣人 ♀

職業： 守護騎士<ガードナイト>

武器： 盾×3

好きなもの： 寝る事

嫌いなもの： 虫系

備考： ギルドでの依頼を中心に生活する、一般的な冒険者。

なぜか語尾に「です」がつく。

登場したばかりで戦闘描写が無い為、戦闘能力は未知数。

リゼル「こんなところかな？」

マトラ「ワードページとかとくにこしてるけどいいのか？」

リゼル「本編じゃないし。」

ソロン「俺って有名だったのか……」

サラフ「私の説明文が適当じゃないか……？」

ミリア「未知数って酷いです……」

リゼル「文句は作者に言え。」

サラフ「了解！くらえ作者！『フリーズボルト』！」

作者権限発動！反射！

サラフ「げふっ！……何で俺ばかり……。」

貴方はそういう立ち位置なんです。

リゼル「それでは！みなさんさようならー。」

ミリア「次回は技紹介なのです。」

## 第一章 登場人物紹介（後書き）

本編の書き溜めが進みません。

これ含めて3話、紹介を投稿しようかと思ってます。

## 第一章 技解説（前書き）

5 ページとかね。 2735 文字とかね。 本当にはかじらないかと。  
一応ネタバレ注意。

5 / 3 抜けていたディスプレイ追加しました。

## 第一章 技解説

マトラ「あれ、技解説って……」

リゼル「はい。量が多くなった為、別に紹介をすることになりました。」

ソロン「そんなにあったか……？」

黒騎士「今回は俺も参加する。」

サラフ「あれ、人物紹介には居なかった奴が……」

黒騎士「ああ、俺のキャラが不安定だから今回は放置とかふざけた理由らしいぜ。」

サラフ「……。」

ソロン「にしても技紹介だと、俺やマトラが中心になりそうだな。」

ミリア「そんな中私は一度も戦ってな……」

リゼル「それじゃ私からー」

・リゼル

キャプチャ

円環に魔力の網を張り、その網で魔法弾等を受け止めてその魔力を吸収する技術。

サラフの攻撃をこれで受け止めた。

キャプチャバースト

キャプチャした魔力を前方に指向性を持たせることでレーザーの様に放つ。

連続攻撃

パターン１、足の裏から魔力を放出して移動しながら、いろんなところから斬りつける。  
パターン２、回転しながら勢いを弱めることなく超高速で攻撃をしかける。

#### 魔法弾連射

『増幅』の魔術式を展開し、魔力弾をその中に放つことにより、無数の魔法弾に変換させて撃ち出す。円環を通すことにより増幅率が上昇。

#### シャイニングブラスター

サラフ２回目登場時に使った、光属性のレーザーを放つ中級魔法。特殊な魔法で、直径、魔力密度等を自由に調整できる。

調整方法によっては、少ない魔力で発動出来るため、無詠唱での行使が容易である。

細く魔力密度の高いレーザーを最初に放ち、徐々に直径を広げることとでサラフに勝った。

#### 飛び蹴り（踏みつけ）

円環を足場に高く飛び上がり、重力系魔法で加速した蹴りを放つ。

#### フリージングゴフィン

対象の周囲に冷気を密集させ、氷づけにする水属性の中級魔法。

対クロムゴーレム戦では威力が足りず、表面を凍らせるに留まったが、その時は

冷やす事が目的だったので問題ない。

#### デイスperl

魔力を分解する中級魔法。

魔法だけでなく魔法技術なども中断させることが出来る。

他の中級魔法にくらべ消費魔力が高い。

サンダーショット

直線的な動きをする電撃を放つ初級魔法  
魔力を込めればそれ相応の威力になり、弾速も早いので汎用性が高い。

バーニングランス

1m程度の炎の槍を生み出し投げつける中級魔法  
高威力と名高い、炎属性のメジャー魔法。

サンダーボール

コントロール可能な複数の電撃球を放つ下級魔法。  
単発の威力は高くないが、同時に当てることで真価を発揮する。  
円環の補助により無詠唱でも3個の電撃球を放った。

マトラ「多いなオイ！」

ソロン「踏みつけ…も技だったんだな。」

リゼル「そそ。君たちみたいに技名叫んでるわけじゃないから目立たないんだよねー。」

マトラ「そーゆーもんか？ま、次は俺だな！」

・マトラ

連槍夢想・双爪燐奏くれんそうむそう・そうそうりんそう>  
突き、袈裟斬り、薙ぎ、回転、様々な攻撃を少しの間も開けずに繰り出す連続攻撃

とか本編で言われてるけども、一定パターンを繰り返すだけなので見切りやすい。

パリイ

攻撃を弾く。威力を9割以上軽減出来るようになってはじめてパリイが使えたといえる。マトラが使つと非常にうるさい。

マトラ「……え？終わり？」

リゼル「うん。終わり。」

マトラ「嘘だっ！きつと他にもっ！！……他にも……あれ？」

ソロン「前でパリイパリイ叫んでるだけだったしな。」

マトラ「そんな…準レギュラー……なのに……。」

ソロン「じゃあ次は俺だな。」

・ソロン

変則連続攻撃

2本の刀を不規則なリズムで不規則に叩き付ける技。

相手にペースを掴まれにくい、自分もよくわかっていない。

ジャミング

魔力をばら撒く。魔術師や後衛の魔法詠唱を敵に探知されにくくする技術。

高度なジャミングになると、ばら撒く魔力に属性付与をつけ、後衛の魔法威力を上げることも可能だが、ソロンには無理。

紅龍・朧くりゆう・おぼろ>  
炎を纏わせた刀で斬り払う。

紫龍・翳くしりゆう・かげり>  
毒の瘴気を纏わせた刀で斬り上げる。

輝龍・翔くきりゆう・かける>  
電撃を纏わせた刀で払い抜ける。

璃龍・虚くりりゆう・うつろ>  
水の魔力を纏わせた刀で回転斬りを放つ。

万龍一閃くよるずりゆういつせん>  
七属性の魔力を纏わせた刀で居合い抜きを放つ。  
もう一方の刀で追撃につなげることも可能。

#### 瞬影剣

2体の幻影を生み出し、時間差で居合い抜きを放つ錯覚剣技。  
9話で放ったもののクロムゴーレムに弾かれた。乙。

ソロン「ん、本当に少ないな。意外だ。」  
リゼル「いや、私に近い数あるからね？」  
マトラ「俺なんかお前らの四分の一だぞ……。」  
サラフ「準レギュラーともあろう者ですらその程度なのか。次は私だな。」

・サラフ

ツインドラグブレス

炎・雷・氷・風の内、二つの魔力球を放つ中級魔法。

サラフは大分使い慣れているらしく、短縮詠唱で放つことが出来る。一発一発に破壊力があり、本来はコントロールも可能だが、サラフは何故かしない。

真っ直ぐとんで行ったためリゼルにはあっさりキャプチャされた。

シャイニングブラスター

リゼルの項参照の事。

サラフは詠唱をして放ったのだが、密度を殆ど上げていなかった。

サラフ「……そういう魔法だったのかっ！」

リゼル「自分の使う魔法の特性も知らないから魔塔に入れないんだって。」

サラフ「そういう事だったのか……あー、ダークナイト、貴様の番だ。」

黒騎士「……ん？あ、俺の番？さんきゅ。」

リゼル「寝てたんだ……もう登場出来るかわかんないっていうのに……。」

黒騎士「あ？俺が再登場しない訳ねーだろバカ猫。んじゃ、始めるか。」

・ダークナイト

高速突き

無駄に速い突きをひたすらに繰り返す。秒間5、6発。

パライ

マトラの項参照。

シャドウプロテクション

盾の表面に亜空間を発生させ、その空間を反転させる事により

相手の魔法を正面から跳ね返す防御魔法。本来は詠唱が必要だが、

12話では魔力水晶を使うことで発動させた。

ちなみにリゼルにこれを破られたのは、サンダーボールが寸前で曲げられ、

亜空間の入り口に当たり、空間が不安定になり崩壊した為である。

黒騎士「こんなもんか。」

リゼル「空間系の魔法はコントロール系の魔法に弱い。覚えておくといいよ。」

黒騎士「はっ、てめーがアドバイスするなんてな。」

リゼル「だって、君の出番あるかどうか分からないし、ね？」

黒騎士「あ？喧嘩うってんのか。上等だ。」

はいはい。ただでさえ本編3つ分くらいの長さになってるから戦闘は控えてね！

これ以上やったら作者権限で出番消すっ！

黒騎士「……くっ。」

リゼル「ではでは、ここまで読んでくれた方々、これからよろしくお願いします。」

マトラ「リゼル、世界観紹介もあるんじゃないか？」

ソロン「だな。」

サラフ「その時でいいんじゃないか？その台詞は。」

ミリア「そうです。焦りすぎです。」

リゼル「そか。んじゃ次回もよろしくっ！ってことで。じゃねー。」

## 第一章 技解説（後書き）

戦闘描写が少ない分、伝わりにくいですが、こんな感じの妄想します。

## 第一章 世界観紹介（前書き）

図の挿入テストも兼ねてます。

第一章を読んだ後にお読みください。

## 第一章 世界観紹介

リゼル「毎度おなじみ、リゼルです。」

ミリア「第一章ラストにしかでてないです、ミリアです。」

リゼル「今回はこの二人で進行します。」

ミリア「じゃあまず、メイン舞台の魔塔の紹介から始めるです!」

リゼル「VTR ごと!」

### 魔塔

高くそびえ立つ塔。

最上階は不明。到達確認地点最高は35階。

5階毎に幅2m程の宝箱があり、なぜか登るたびに補充されている。又、塔と一緒に入れるのは5人まで。

さらに複数パーティー入るには前の隊と1日、時間を開けなければならぬ。

大海にぽつんと浮かぶ魔島に存在していて、

塔自身が放つ魔力の霧によって一般人では近づくこともできない。

この霧の地帯も魔燈とよばれ、この魔燈の中では、移動魔法や船を渡すことも難しい。

なので基本的に物好きしか来ない。

螺旋構造ではなく、次の2つの構造を繰り返す形となっている。

### 魔塔の内部構図

1 > i 2 3 0 9 3 — 3 0 7 3 <

2 > i 2 3 1 8 0 — 3 0 7 3 <

? 下からの階段。1階ではここに入り口がある。

？魔物。ここに魔物がいる。

？扉。魔物を倒さない限り何故が開かない。

？5の倍数の階にはここに宝箱がある。20Fは特別に反対側に宝箱がある。

？上への階段。

リゼル「うーん、入場規制に関しては今は大して昨日してないね。」  
ミリア「でもでも、地下遺跡が見つかったからは結構大変だったです。」

リゼル「まあ、そうだねえ。今は落ち着いてきたけど。冒険者も低水準だし？」

ミリア「本当に強い人達は、魔塔にあんまり興味しめさないです。」  
リゼル「そうなの？」

ミリア「事件とかならまだしも、こんな辺鄙なとこまでわざわざ来ないです。」

強ければお金にも困らないですし、大都市に近いほかのダンジョンとか

そのへんにいくはずです。大都市南東の洞窟とかもまだ未制覇なのです。」

リゼル「あー、成程。そのへんの人が来てくれたら攻略も進むんだけどなー」

ミリア「悩んでも仕方ないです。えーと、次はなんですか？」

リゼル「ミリアの所属してる『冒険者ギルド』についてかな。」

ミリア「冒険者ギルドですか。了解です。」

リゼル「んじゃVTR　ごー！」

## 冒険者ギルド

冒険者達の身分証明、依頼の一括受注を担う機関。  
遺跡、ダンジョン、洞窟、その他の危険区域の管理等もしている。  
大都市に本部を構え、さらに殆どの街に支部をもっている。

ミリア「短っ！短すぎるです！」

リゼル「そりゃー、本編とはあんまり関係ないからねえ。」

ミリア「それを言っちゃおしまいなのです…。」

リゼル「ギルドで強さに応じてランク分けでもしてくれてればなあ」

ミリア「前にその制度をとった事もあるのですが、調整が難しかったらしいのです」

リゼル「そうなんだ？そんな話初耳だけど。」

ミリア「大都市の方で試験的にやってたですから、その近辺の人しか知らないです。」

リゼル「へー。……っと、ギルドの話はここまでにしとこうか。」

ミリア「そうですね。次はどこを紹介するです？」

リゼル「次はないよ。」

ミリア「えっ、大都市だとか大陸だとか、そのへんは紹介しないです？」

リゼル「だって、作者が設定してないもん。」

ミリア「なんていきあたりばったりなんですか……。」

だって、ねえ。

リゼル「第二章も殆どかけてないって言うし…心配だねえ。」

ミリア「です……。」

リゼル「でも、読んでくれてる人もいるみたいだし、頑張るでしょ。」

「  
うん、頑張るよ。」

リゼル「それでは、世界観紹介もこの辺で。」

ミリア「ここまで読んでくれたみなさん。本当にありがとうございますです。」

リゼル「これからも『塔の番人リゼル』をよろしくおねがいします！」

## 第一章 世界観紹介（後書き）

ミリア「…これって章の完結毎にやるんですか？」  
さあね。

## 15 みりあ（前書き）

お待たせしました。第二章です。

5 / 7 誤字修正

## 15 みりあ

リゼル「この気配……、またあいつかあ。」

ミリア「あいつって誰なのですか？」

彼女はミリア「ロロセクト、16歳。彼女はリゼルと共に門番をしている。」

遺跡発掘のニュースが冒険者に広がった今、リゼル一人では捌き切れないだろうと自ら

協力している。また、リゼルも認める実力者であり、魔塔攻略メンバーにも入っている。

リゼル「結構前から通ってくる魔術師。使える魔法は強いんだけど、使い方がか悪すぎて弱い。そのくせ攻撃的だからなあ……」

……

ミリア「忙しいのになんとも来られると迷惑なのです……そうだし、いつその事鍛えてあげたらいいのです。それで恩を売って、強くなったらメンバーに引き込む……一石二鳥なのです。」

リゼル「ミリア、案外黒いね。」

ミリア「？」

そうこうしてるうちに、自称「大魔術師の器」サラフ「ネグレスさん（32）登場。」

サラフ「番人リゼルっ！今日こそ通してもらおう！」

リゼル「ミリア、相手してみてくださいませんか？」

ミリア「了解です。」

守護騎士の武器は通常盾と剣。だが、ミリアは一味ちがうスタイルをもっている。

彼女の武装はタワーシールドとターゲットシールド。着込んだプレートアーマーの

背中には魔方阵の刻まれたラウンドシールドがくくりつけられている。

サラフ「両手に盾……馬鹿にしているのかっ！『サンダーランス』」

！」

ミリア「たあああああ！」

右手のタワーシールドが電撃を防ぎ、ミリアは盾を構えたままサラフへと突進する。

サラフ「貫け、『ピアスランス』！」

魔力の槍がサラフの手から放たれる。これは盾や結界を貫く為に開発された呪文であり

普通ならばサラフの判断は正しいといえる。だがミリアにとってはむしろ都合だった。

ミリア「『デイスperlサークル』っ！」

魔力の槍がぶつかる直前、ミリアは横に一回転する、それにより槍は背中のラウンドシールドに当たり、消滅する。

サラフ「なっ……！？」

ミリア「『スタンプブレイク』。」

回転する勢いで突き出されたターゲットシールドがサラフへ当たる瞬間、電撃が弾ける。

サラフ「ぐはっ！！」

ミリア「明日から貴方に稽古をつけてあげます。リゼルさんが。」

リゼル「あ、私がやるんだ……。」

ミリア「私はあんまり魔法使えません。」

サラフ「く……そ……貴様……ら……。」「ガクッ

## 16 けいこ

リゼル「じゃ、私の魔法を追いかけるようにコントロールしてね。」  
サラフ「何で私がこんなことを……。」

リゼル「弱いから。」

サラフ「くっ……。」

魔法の特訓。それは様々な種類がある。

知識の蓄積、コントロール、威力、短縮詠唱、無詠唱。全てこなし  
てこそ、強くなれる。

リゼル「いくよ、『サンダーボール』！」

サラフ「舞い上がれ、『ツインドラグブレス』！」

雷の球が二つ浮き上がると、炎と氷の球がそれを追いかける。

左右へ別れた雷の球を、炎と氷が別々に追う。上、下、右、上、前。  
雷が交差すると、ソレを追っていた炎は氷が衝突し、消滅する。

リゼル「ほら、自分の魔法を把握してないからこうなる。」

サラフ「くっ、まだまだ！」

リゼル「だめ。次は勉強。そんなに時間無いんだから、一つだけに  
構ってられないよ。」

サラフ「む……。」

リゼル「ありゃ、お客さんだ。ミリアはまだ戦ってるみたいだし、  
行ってくるね。」

サラフ「あ、ああ……。」

――1週間後――

リゼル「だいぶ、強くなったね。」

サラフ「……一週間前、確かに私は慢心していた。私が魔法を撃つ  
だけでよかったのは、

前線で攻撃に耐えている仲間が居たからだだったというのに。

それを分らずに

        なんの努力もなく、魔法を覚え、撃つだけ。全く、何が大魔術師の器だ……。」

リゼル「でも、今の君なら、一人でも戦えるんじゃない？」

サラフ「貴様のお陰でな。今度こそ、塔に入らせてもらうぞ！」

スタッフを掲げ、その体に魔力を纏わせるサラフ。それに、リゼルは応じる。

リゼル「別に戦わなくても今の君なら入れてあげるんだけどね。

        戦わないと満足しないみたいだし、しょうがないか！」

お互いにバックステップで距離を取る。その二人の間にいる、ミリアがてを掲げる。

ミリア「二人とも準備はいいです？始めるですよ？」

二人が頷く。

ミリア「開始っ！！！」

16 けいこ(後書き)

—おまけ—

ミリア「今回出番少なすぎです……」  
リゼル「君のせいだ。」

## 17 せいか（前書き）

時間ギリギリで仕上げたから誤字が多いかも・・・

## 17 せいか

ミリアの掛け声と同時に、お互いが武器を向け、魔法を放つ。

サラフ「舞い上がれ、『ツインドラグブレス』！」

リゼル「……堕ちろ、『グラビティスクエア』。」

二人の間に発生した重力場によって炎と雷、二つの力は大地に叩きふせられる。

サラフ「その光を以て、彼の者を穿て。『ブライトネスレイ』！」

リゼル「その魔法は、遅いつ！」

強烈な光がリゼルの上空に発生。刹那、リゼルは重力場を消し、間合いを詰める。

サラフ「フェイクだ。『シャイニングブラスター』！」

リゼル「……飲み込めつ！『アースウェイヴ』！」

強烈な魔力を秘めた、細いレーザーが放たれる。

それを遮るかの如く、リゼルの前方に大地の波が発生、その光を阻む。だが、

大地は僅かに抵抗をしたものの、光はそれを貫いた。

しかし、その先に居るはずリゼルに、光は当たらなかった。

サラフ「そんな避け方があったか……」

リゼル「魔法は使い方。この一週間でイヤというほど思い知ったでしょ？」

波は、上下する。リゼルの立っていた位置は、波の反動により窪んだ大地。

そういいながら笑みを返すリゼル。そして、彼女は言った。

リゼル「君の方が魔法はうまいし、このままじゃきついだろうから

……本気で行くよっ！」

サラフ「……させるかつ！『エクスプロージョン』！」

間合いを一気につめたりゼルに対し、サラフは前方に爆発を起こすことで牽制する。

だが、リゼルは上空に避けていた。そこから放たれるのは、数々の魔物を葬った、踏みつけ。

サラフ「っ！『メタスタシス』！」

リゼル「甘いっ！」

とっさに転移したサラフは見た。

地面へ放たれた踏みつけの威力は、全て加速へと向けられた。その瞬間、円環が首筋に当てられる。

サラフ「私の負けか……。」

リゼル「強くなったじゃん。エクスプロージョンは安易過ぎたけど。視界ふさがるし。」

そう言いながら、円環を腰に掛ける。

服に付いた土を払いながら、リゼルは言う。

リゼル「……ねえ、サラフ。私達と、魔塔を攻略してみない？」

サラフ「……私で、いいのか？」

リゼル「今の君は強いから、大丈夫だよ。どうかかな？」

サラフ「……ああ。喜んでその誘い、受けさせてもらおう！」

パーティーに、サラフが加わった！

17 せいか（後書き）

ミリア「出番…」

## 18 なかま（前書き）

また時間ぎりぎり。

## 18 なかま

リゼル、ミリア、サラフの3人は、魔塔攻略に向けて話し合っていた。

サラフ「それで、私以外の仲間はどうするつもりなんだ？」

ミリア「いざとなったら冒険者ギルドで募集するって方法もあるです。」

リゼル「うーん、それはちょっとなあ。信頼できるメンバーを探したいけど……」

それは難しい。それがリゼルの考えだった。

魔島へ訪れる冒険者のレベルが総じて高くないからである。

サラフ「私の時の様に鍛える、という手はどうだろうか。」

リゼル「君はもともとがよかったから一週間でできたものの、

普通の冒険者を鍛えるには相当の時間にかかるしなあ。」

ミリア「私が前衛、リゼルさんが万能、サラフさんが後衛ですから、攻撃力のある人と回復できる人が欲しいです……うーん、

難しいです。」

リゼル「あ、人来た。いつてくる。」

こうして時間だけが過ぎていった。

——そして半月後、魔島にある人物が訪れる。

リゼル「うん、君なら合格。ただ、無理だと思ったらすぐ逃げてね。」

冒険者「OK、じゃ、行ってくるぜ。」

この日も魔島には冒険者がたくさん訪れていた。そして順番待ちの最後の一人。

リゼル「えっと、次の人——」

???「元気そうだな、リゼル。」

リゼル「……え？」

クルト「どうした？忘れちゃったか？俺だよ。重戦士のクルトだ。」

リゼル「クルト……覚えてるよ。忘れると思う？あんな事故があったのに。」

クルト「まあ、忘れないわな。お前が魔塔に挑むっつーから手伝えることないかと思って来てみたんだが。なんかあるか？」

リゼル「あ、うん。メンバー足りないところだったんだ。手伝ってもらえるかな？」

クルト「おうよ。そのために来たんだしな。」

二人が握手を交わしているところに、ミリアとサラフがやってくる。サラフ「どうしたんだ？」

ミリア「仲間が見つかったですか？」

リゼル「私の昔の仲間が手伝いに来てくれたんだよ。重剣士のクルト。」

クルト「おう、俺がクルトだ。よろしくな！」

サラフ「魔術師のサラフだ。よろしく頼む。」

ミリア「守護騎士ミリアです。よろしくです。」

クルト「よし、今夜は歓迎会だな！」

リゼル「君は酒が飲みたいだけでしょ。……多分いま無いよ？」

その日、クルトの悲痛な叫びが魔島全体に響き渡った。

## 18 なかま（後書き）

感想まっていますっ

## 19 ふそく

冒険者「うおおおお！」

剣閃が走り、強烈な金属音が耳を劈く。次の瞬間、冒険者の男は弾き飛ばされていた。

クルト「だめだな。この程度じゃ、魔塔には入れられない。」

冒険者「くっ……」

クルト「攻め方は悪くないが、守りが甘すぎる。仲間をつくるか、そこを改善しろ。」

冒険者「分かった……ありがとな、おっさん。」

クルト「おっさんじゃねーよ。」

リゼル「おい、クルトー！話があるんだけどー！」

少し哀愁の漂う冒険者の大きな背中を眺めるクルトを、姿がかるうじて見える程の遠くから猫獣人が呼ぶ。

クルト「ったく……」

己の武器であるグレートアックスを担ぎ直し、クルトはその場を後にした。

リゼル「えっと、皆に集ってもらったのは、仲間集めの事なんだけども。」

サラフ「なにかいい案が思いついたのか？」

リゼル「私たちのパーティーには回復役が足りない……ってミリアいってたよね？」

ミリア「確かに、クルトさんが来る前にいったかもです。」

リゼル「魔塔の20Fについて、みんな知ってる？」

クルト「ああ、そうか！」

サラフ「??」

ミリア「どうということなのです？」

リゼル「20Fは試練の間。1対1である敵と戦わなければいけな

い。

つまり、回復役を探すなら、一人でも戦える实力が必要なんだ。」

ミリア「そんな優秀な回復役は大抵既にパーティー組んでるですよ……。」

サラフ「回復役に拘る必要はあるのか？」

クルト「あるだろう。俺とミリアが近距離、リゼルが中近距離で戦うんだ。」

前線は充分、むしろ増えると動きづらい。お前の様な魔法攻撃型をいれたとして、

前衛が邪魔で攻撃できる隙間が少ないから、二人魔術師がいても

射線が被って魔法を相殺しちまうから、お互いに能力を発揮できなくなっちまう。」

サラフ「そうか……。」

ミリア「冒険者ギルド伝いで探してみるです？」

リゼル「それが一番いいのかな……ミリア、悪いけどお願い。軽い試験ありって事で」

ミリア「了解です。連絡取ってくるです。」

後日、各街の冒険者ギルドに、こんな張り紙がはられた。

【「パーティーメンバー募集——回復系スキルを使える方で、一人でも戦闘能力のある人を探しています。入る際に、軽い戦闘試験あり。詳しくは魔島のリゼル迄！】

## 19 ふそく(後書き)

感想とか、お気に入りとか、レビューとか、応援とか ありがとうございます  
(殴)

## 20 きたつ

塔が不気味な存在感を放つ、夜の魔島。その地に降り立つ、一匹の狼。

その身体を淡い光が包み、直後、消える。すると、それまでそこに居た狼の姿はなく、かわりに一匹の獣人の姿があった。

―翌日

リゼル「んー。今日は珍しく暇だねえ。」

ミリア「今日は大都市とその周辺が合同でおっきなお祭りをやるのですよー。」

クルト「む、酒を飲み損ねたか。」

サラフ「祭りか、あまり興味は無いが、こつも暇だな。」

リゼル「んー、パーティーメンバー揃ったら小規模にお祝いでもする？」

クルト「いつになるんだよ……。」

???「あー」

リゼル「……？」

だらだらと雑談をしていたリゼル達に、声がかかる。

声の方へ振り返ってみれば、申し訳なさそうな顔をした狼獣人の子が立っていた。

リゼル「あれ、いつの間に人が……」

狼獣人「えと、獣化くビーストアウト>して来たので……その、すみません。」

リゼル「え、いや。謝らなくてもいいんだけど……それで、どんな用かな？」

狼獣人「あ、その。張り紙をみて……。」

みんな「「「「!!!!!!」」」」

狼獣人「!？」

ガシッ!という音がしそうな程、ミリアが狼獣人の子の手をつかむ。

ミリア「よろしくですつつつ!!!!」

狼獣人「ご、ご、ご、ごめんなさいいっ!」

リゼル「こら。」

強烈な回し蹴りがミリアを襲う。もちろんリゼルの蹴りだ。

背後から不意を突かれたミリアは小屋の壁へ激突、気を失った。

リゼル「大丈夫？」

狼獣人「え、あ……はい、ありがとうございます。」

リゼル「んと、要件についてんだけど…もしかしてパーティー加入希望なのかな？」

クロス「あ、はい!えと、魔弾使いくバレットマスターのクロスです!」

クルト「魔弾使いか。武器はその双銃くツインハンドガンか?」

クロス「あ、えと、ランチャーと組立式の狙撃銃も持ってます。」

サラフ「ふむ、それなら攻撃面にも融通が効きそうだな。」

リゼル「んと、じゃあ、外に出てもらえる?実力試験、するからさ。」

クロス「はい!」

20 きたつ（後書き）

5 人目。

## 21 くろす

クロス「じゃ、じゃあ…行きますっ！」

魔弾使いの使う銃は、基本的に銃弾を撃ち出す事ができない。弾に込められた魔法を放つ為の銃。その銃口からは様々な魔法が打ち出される。

クロスの双銃も勿論それであり、無数の炎弾がリゼルを襲う。

リゼル「ん、『マジックシールド』……おお、威力あるなあ」

そう言つて壊れかけた魔法障壁を消し、円環を一つ、クロスに投げつけるリゼル。

クロスはそれに向かって双銃を連射、次の瞬間。

円環は氷によつて大地へ束縛される。

リゼル「いつの間に弾替えを…！」

円環を通り越して来た氷弾を避けながら、リゼルは急速にクロスへと近づく。

クロス「……早いっ！」

リゼルの回避力に驚愕しつつ、クロスが瞬時にランチャーを構え、撃った。

それはリゼルの進行方向の大地へ着弾、周囲に強力な重力場を発生させる。

リゼル「これは……グラビティスクエア、かな？」

片手をつき、辛うじて立っているリゼル。数倍に及ぶ重力下、立つ事すらも困難を極める。

クロス「そ、そうですね。それで、えと、これで、とどめっ！」

いつの間にか組み立てられていた狙撃銃から、鋭く、強い光を放つ電撃が放たれる。

だが、その電撃は、氷の碎ける音と共に弾かれた。

クロス「っ!？」

刹那、飛来する円環を横に飛ぶ事で紙一重に避けるクロス。だが、

そんな彼の耳に、リゼルの声はつきり届く。

リゼル「……チェンジ。」

突如、彼の側にリゼルが現れる、流れる様な動作で円環がクロスの首に当てられる。

リゼル「おしまい。お疲れ様でした。」

クロス「う……ありがとう、ございました。」

リゼル「反省点はとどめを単発にしたことかな。さっきみたいに弾かれたりすると

隙だらけだし、獣化して避けられても危ない。あとは私の武器にについて

知識不足ってとこかな？あの程度の氷だったら、無理やり突破できるからね。」

クロス「あ、そうか。獣化したら体格が変わって避けられるんだ……」

関心、その直後、しょんぼりするクロスを見ながら、リゼルは言う。  
リゼル「じゃ、これからよろしくね？」

クロス「え？あの、僕、不合格なんじゃ……？」

リゼル「まさか。こんな優秀なバックアップを不合格にする訳ないって。」

クロス「……えと、よ、宜しく願いますっ！」

リゼル「じゃ、お祝いしよっか！パーティー集結祭だっ！」

この日、大都市とは遙か遠いこの魔島でも、楽しいお祭りが行われたそう。

## 21 くろす（後書き）

近頃、出来栄が微妙な気がする。  
自身がないだけなのか本当に微妙なのか・・・

## 22 いけー

リゼル「じゃ、出発だー！」

みんな「「「「おー！」「」」」

パーティーメンバーも揃い、ついに魔塔攻略に踏み出すリゼル一行。その進行速度は、少々異常だった。

ー出発から6時間。現在、19F。

クルト「おらあっ！」

巨大な戦闘用の斧、グレートアックスがクロムゴーレムを粉碎する。

クロス「お疲れ様ですっ」

ミリア「さくさく進めるですー！」

サラフ「ふむ、次が例の20Fだな？」

リゼル「うん、次から難易度が跳ね上がるから、覚悟してて。」

クロス「だ、大丈夫でしょうか…」

ー20F

リゼル「また来たよーっと。」

黒騎士「ちっ、てめーかよ。つか、大所帯だな。」

リゼル「今回は本気で攻略しにきたから。」

黒騎士「俺が全員を通らせると思うか？」

リゼル「思う。」

黒騎士「つてめえ……！」

リゼル「んじゃ皆、宝箱のところからモニター出来るから。」

サラフ「分かった。多少の対策は立てておこう」

クロス「はいっ！」

ミリア「了解です。」

クルト「俺は何度も戦ってるけどな。」

それぞれの返答を聞いたのち、リゼルが前に一歩進む。

すると、周囲の壁が変形し、リゼルとダークナイトだけを綺麗に隔離する。

サラフ「すごい……」

ミリア「あ、本当です！ここでリゼルさん達がみえるです！」

そんなミリアの言葉に振り向いてみれば。

宝箱の周囲の床に、様々な角度から見たリゼルとダークナイトが映っていた。

サラフ「一体、どれだけの技術がここに詰め込まれているんだ……！」

クルト「知らねーけど、知りたいなら……登り切ってやるしかねーんじゃないの？」

サラフ「……そうかもしれないな。」

画面の中のリゼルが動く。

リゼル「また、こてんぱんにしてあげるよっ！」

第一戦、リゼルVSダークナイト、開始――

## 22 いけー（後書き）

スランプ気味。

23 いち。(前書き)

番号つけわすれを修正。

## 23 いち。

クロス「こ、これがリゼルさんの本気……」

ミリア「速いです……」

リゼル、そしてダークナイトの二人は、お互いに攻めの姿勢を崩さない。

お互いに攻撃を受けようとも、逸らそうともせず、ひたすらに避けながらも、攻撃する。

黒騎士「ちょこまかと動きやがってっ……！」

リゼル「悪いけど、今回は絶対に進ませてもらうよっ！」

会話、それは余裕の証。お互いに少しずつ手を抜いているからこそ、できるもの。

彼女の声が戦場から消えたとき、その攻撃は加速する。

黒騎士「っ……！」

ダークナイトが攻撃を避けきれず、盾で防ぐ。その時、聞こえるリゼルの声。

リゼル「貫け。——『ピアシスランス』」

魔力の槍が盾へとぶつかる。槍は形を崩し、魔力が盾の表面を伝う。その魔力が反対側へ辿り着いたとき、魔力の槍は再構成される。

黒騎士「くそがっ……！！」

再構成された槍が放たれる直前、盾を投げ捨て、大きく後ろに下がるダークナイト。

だが、それを逃がすリゼルでは無い。体勢が整う前に、追撃に出る。

流れるような高速連続攻撃。ダークナイトは槍の柄をも活用し、捌いていく。

リゼル「無限の赤、その中にて燃ゆる精霊よ。汝、その衝撃と共に、全てを焼き焦がせ。」

瞬間、円環の一つが弾かれ、そこに槍が突き出される。それは、熟練していたが故の、自然に放たれたカウンター。それは、詠唱を完成させた、リゼルが誘導したカウンター。

黒騎士「やべっ——」

リゼル「『ブレイクフレア』！」

もう一つの円環が、その槍を叩く。瞬時、打点に魔力が注ぎこまれ、爆発を起こす。

無防備なダークナイトに、リゼルが立ちふさがる。その手には紅蓮の炎。

黒騎士「くそっ……降参だ。」

リゼル「避けたのには驚いたけど、ね……」

あの瞬間、ダークナイトは自ら槍を離す事により、爆発を逃れた。そして彼は

自らの盾を拾わんと疾走する。しかし、盾を目前にした時、その間にリゼルが降り立った。

彼に残された術は、もう無かった。

壁が動き、勝者であるリゼルを彼女の仲間が迎える。

ミリア「格好よかったです！」

サラフ「素晴らしい戦いだった。」

クロス「す、すごかったです！」

リゼル「ありがと。皆も頑張ってたね？」

クルト「だな。とりあえず、次は俺が出るか。一応経験者だしな。」

勝ち星、一つ目。

## 23 いち。(後書き)

戦闘そのいち。リゼルが一回戦った事あるから短めに見えました。  
5人分だから全員短めにしたほうがいい気もして迷い中。

## 24 に！。(前書き)

お気に入り登録件数が増えてた。とっても嬉しい。

## 24 に！

クルト「久しぶりだな、黒いの。」

黒騎士「っ……！てめーかよ……。」

新しい槍をどこからか持つてきたダークナイト、そしてクルト。対峙する二人を壁が隔離する。

黒騎士「今度は盾が壊れるんじゃないか……？」

クルト「して欲しいならやってもいいが？」

黒騎士「冗談。」

互いが武器を構える。その瞬間、緊迫した空気が辺りを包む。

クルト「来ないなら……俺から行くぞ！」

黒騎士「させるかつ！」

ダークナイトの持ち味は速さ。神速で間合いを詰め、その勢いを全て乗せた突きを放つ。

音速を超えたソレは、衝撃波を伴い、回避不能かとも思える程の物だが、

クルト「あまいぜ。」

槍の突き出した先にクルトは在らず、代わりに上方から声が聞こえる。

クルト「アースクエイクもどきだ。喰らってみな。」

黒騎士「っ！」

大きく後方に跳び、距離をとるダークナイト。だが、間に合わない。

天井近くまで跳躍していたクルトが、重力魔法の力を借り、急加速。そして、その勢いのまま、グレートアックスの石突きを地面に叩きつける。

その瞬間。熱を持たない爆風の如き衝撃が周囲の空間を支配し、全ての者を吹き飛ばす。

黒騎士「がはっ…！」

クルト「終わりだ、黒いの。」

黒騎士「くっ…！」

空中で体勢を立て直し、着地と同時に、盾を前方へ突き出す。完璧なパライング。

しかし、さらなる衝撃がダークナイトを襲う。その力の大きさに、盾が…粉碎する。

黒騎士「っ！？」

宙に投げ出されるダークナイト。直後、落下の衝撃が全身を痛めつける。

クルト「終わりだな。」

彼は、2メートルを超える大斧を片手で持ち、ダークナイトへと向ける。

黒騎士「…そうだな。」

壁が動き、空間が広がる。

リゼル「お疲れ様、クルト。相変わらずだねえ。」

クルト「おう。んで。次は誰が行くんのだ？」

リゼル「君の一撃にミリアとクロスは驚きすぎて固まっちゃってるから、サラフだね。」

サラフ「…善処する。」

勝ち星、二つ目。

## 24 にー。(後書き)

ダークナイト戦は1ページづつにしました。長引きすぎても進まないですね。

## 25 さん。

サラフ「出来るかどうか分からないが……貴様を倒す！」

またもどこから持ってきたかわからない新しい盾を持ち、さらにどこから持ってきたか（中略）なポーションを飲み干したダークナイトが言う。

黒騎士「今の俺は機嫌が悪いんだ。叩きのめしてやる。」

――勝負が、始まる。

開始直後、サラフの周囲に膨大な魔力が収束……否、サラフから膨大な魔力が溢れ出る。

黒騎士「！？、先手必勝！」

サラフ「『メタスタシス』。」

魔力の気配が転移し、槍は空を貫く。

サラフ「止め、その全てを。『リジェクトエリア』。」

黒騎士「っ！？……くそったれ！」

魔力の壁が、ダークナイトの移動を遮る。槍を全力で突き出すも、弾かれる。

ダークナイトが体勢を立て直し、深呼吸をする。そして、槍が輝き出す。

黒騎士「こんなのすぐにぶっ壊してやるよ！」

サラフ「氷結。すべてを封じ、すべてを開放するもの。その力、此処に在れば――」

それには目もくれず、サラフは淡々と詠唱を続ける。

時が来た。槍が光を強め、突き出される。魔力の壁は砕かれ、サラフへと槍の穂先が迫る。

サラフ「―如何なる者を拒む、悠久の結晶。来たれ、『ブリザード・レイ』。」

冷気の波動が、広がる。

部屋中を、氷の礫が埋めつくす。

黒騎士「っ!?!」

冷気に波動は、全ての金属を凍りつかせる。槍だろうと、盾だろうと、鎧すらも。

黒騎士は氷により全身を束縛される。身動きの取れない身体を、幾千もの礫が襲う。

サラフ「折角強くなったんだ。限界を試してみたかったのだが、これ程違うとはな。」

自らが鍛えた魔術師を迎える、リゼル

リゼル「いい戦い方だったよ。リジェクトエリアの使い方は本当によかった。」

四方に物理障壁を展開する魔法、リジェクトエリア。防護面積の關係上、

強度を高めるには膨大な魔力を消費する。だが、

リゼル「最初に魔力を開放して障壁を貼ったように見せかけて、前だけ強度を上げてたんでしょ？ほんと、ずる賢くなっちゃって。」

サラフ「貴様のおかげだ。本当に感謝している。」

リゼル「しかし、最初の印象と随分違って、誠実なんだよね。サラフって。」

クロス「あの、僕はどのタイミングで行ったらいいのでしょうか  
……」

クルト「行けばいいんじゃないか？あの師弟は放っておいて。」

クロス「そうですね、えと、じゃあ、行ってきます。」

勝ち星、三つ目。

25 さん。（後書き）

記念すべき「5の2乗」話目。いや、関係ないけど。  
あと二人。次はクロス君。

それと、最近改行を適当に入れるようにしてみたのですが、どうでしょう？ 感想いただけると嬉しいです。

26 しー。(前書き)

今回はクロスくんVSダークナイト。

## 26 しー。

彼は困惑していた。

クロス「あ、えと…槍、じゃないん…ですか？」

いままで槍を使ってきたダークナイトが、今回は剣を持っていることに。

黒騎士「あ？ああ、同じ武器つかうのは3人までって決めてんだよ。

同じだと読者が飽き」…ゲフンゲフン。攻撃が読まれちゃうからな。」

―勝負が、始まる。

黒騎士「喰らってろ。暗黒剣之壱・地走り！」

ダークナイトが剣を振り上げると共に、黒い斬撃波が地面を伝いクロスへと伸びる。

クロス「そ、そこっ！！」

迫り来る黒の刃を、クロスは重心をズラしてかわし、回避と同時に反撃を放つ。

だが、大自然の力を纏う弾は盾に阻まれ、ダークナイトには届かない。

黒騎士「うぜえ。暗黒剣之？・次元波―」

クロス「させませんっ！」

ランチャーから青い弾が放たれる。それを見たダークナイトは、すぐさま技を中断、

そして、懐からだしたクリスタルを上には振り投げ、言い放った。

黒騎士「『シャドウプロテクション』！」

ダークナイトの盾を魔力が包む。そして、その盾がランチャーの弾を受け止めると、

青の弾はあろうことかクロスへと方向を変えて進み出す。

クロス「えっ！？…えと、ブレイク！」

その言葉と同時に、青い弾は弾け、辺りに氷の塊が飛び散る。氷片を全て盾で跳ね返したダークナイトが剣を掲げ、言う。

黒騎士「まじでうぜえ。暗黒剣之…」

瞬時、何かが剣を弾き、ダークナイトの体勢を崩す。

クロス「…させません。」

狙撃銃を向けるクロス。苛立つダークナイトは、剣を下段に構え、足に力をこめる。

黒騎士「うざってえ。ちびちびした攻撃しやがって。流石チビだな。

付き合うのも面倒くせえから、一瞬で仕留めてやるよ。覚

悟しやがれ。」

それと同時に、急加速するダークナイト。低姿勢、且つ前傾姿勢から出る速度は、

並の動体視力では視認できない。そんな彼に、聞こえた音。

—ぶつん。

黒騎士「なっ！？」

クロス「…僕、チビじゃないもん！…だから、…だから！チビとか言うなああああ！」

クロスの周囲全域から放たれる幾百もの七色の銃撃。その弾は意思をもったように

壁に跳ね返り、或いは曲線を描き、或いはその位置を轉移し、ダークナイトへ収束する。

それは、ダークナイトに驚く暇「しか」与えなかった。

——勝ち星、四つ目。

## 26 しー。(後書き)

クロスのコンプレックス発覚。

そして投げやり感満載。戦闘シーンは語彙力が必要ですね。

…この作者は戦闘ばっかの小説でいまさら何を言ってるんだか。

壁が開き、その中には立ち上がっているダークナイト、そしてクロスの姿。

ミリア「あれ、クロスが勝ったはずなんです？」

黒騎士「ああ、俺の負けだよ。まったく…無茶苦茶しやがってあのガキ…」

ポーシオンをがぶ飲みするダークナイトをスルーし、クルトがクロスを抱えて持ってくる。

リゼル「あー、魔力枯渇おこしてるねえ。」

サラフ「ま、あれだけの攻撃をしたんだ。無理も無いだろう。リゼル、手伝ってくれ。」

リゼル「りょーかい。んじゃいくよ、せーの、『マインパート』」。

「

クロスの胸に重ねられたリゼルとサラフの手が、青白い光を放つ。数秒間それが続いたかと思うと、それはクロスの覚醒と同時に止んだ。

クロス「あ、あれ…？」

リゼル「おはよ。んでもってお疲れ様。」

サラフ「貴様は魔力枯渇を起こしていたんだ。だがまあ、よくやったんじゃないか。」

クロス「あ、えと。迷惑かけちゃって、すみません…あと、ありがとうございます。」

リゼル「いいのいいの。それよりも。ミリア…もう始めちゃってる

みたいだよ。」

モニターには既に対峙しているミリア、そしてダークナイトの姿。

リゼル「まあ、ミリアならすぐ終わると思うけどね。」

黒騎士が、剣から黒刃の渦を放つ。それは止む事なく、ミリアを襲い続ける。

サラフ「……それは、どういう事だ？」

ミリア「光よ、我が盾に宿れ。そのすべてを払い除け、その道を開け。」

右手のタワーシールドが白く輝き、黒い渦を弾き始める。

リゼル「相性の問題。単純で真正面からしか戦わないあいつじゃ、勝ち目はないよ。」

その盾を前へ向け、走る。戦場に轟めく闇の中、光の筋が伸びていく。

リゼル「あいつの剣じゃ、どんな技を使っても、ミリアには届かない。」

黒騎士「暗黒剣奥義之壱・黒龍居合！」

突進してくるミリアを、ダークナイトは其の奥義を以て迎え撃つ。黒に凝縮された刃は、全てを切り裂く悪魔の化身。対するは光を纏いし盾の騎士。

リゼル「それ位に、正面をとった状態のミリアは強かったから。」

ミリア「『アイソレーション』。」

ダークナイトの黒き刃は、光を纏った盾にぶつかりと同時に、「止まる」。

黒騎士「ぐっ！？『シャドウランス』！」  
ミリア「『デイスペルサークル』。」

その場にタワーシールドを置き捨て、背中から円形の盾を取り、防御。その盾により  
ダークナイトの魔法は打ち消され、彼の構える盾と、彼女の左手に持つ盾が、ぶつかる。

ミリア「終わりです。『ウェイヴ・インパクト』。」

瞬間、強烈な衝撃がダークナイトを飲み込み、壁へと打ち付け、その音を響かせた。

魔島攻略部隊、20F・試練の間―全員突破。

## 27 じー！（後書き）

徹夜明けで書いたから変な所があるかも。

ともかくこれで20F突破。話がやっと進みそうです。  
それにしても空白が空きすぎな感じがしないでもない。

## 28 きもん（前書き）

詰め込みすぎた。

## 28 ぎもん

リゼル「ミリア、お疲れー。」

ミリア「これで先にすすめるのです。」

クルト「つたく、本当に面倒臭い階だ。」

クロス「あ、あの…今日はこの階でキャンプしませんか？」

リゼル「ん、そうしようか。」

そんな会話をしているうちに、ダークナイトが目を覚ます。  
大分やられ慣れているのか、復帰が異様に速い。

黒騎士「てめーら合格だ。扉開けてやる。」

ダークナイトが「また」どこからともなく鍵を出して見せる。

サラフ「先程から気になっていたのだが…どこから出している？」

黒騎士「んー、亜空間…つつつたら信じるか？」

サラフ「！！」

驚愕するサラフ。だが、彼以外はあまり驚いていない。  
というよりも、よく分かっている様子だ。

リゼル「どつたの？」

ミリア「忘れ物でもしたですか？」

サラフ「…亜空間は、『まだ実用レベルでは確立されていない技術』  
なんだ。」

リゼル「？」

黒騎士「ほう。よく分かってるじゃねーか。さすが魔術師ってところか。」

サラフ「戦闘に使えるそうな物は全部研究範囲なんでね。」

リゼル「研究しててあの魔法知識だったんだ……。」

うるさいぞリゼル。

黒騎士「戦闘…魔導具の携帯が目的か？それで、俺が亜空間を使ってるって知って——」

サラフ「『どうするつもりだ？』か。……どこでそれを手に入れたか、問い詰めるさ。」

黒騎士「……ちつ。ちよつとそこで待ってる。起動・『レポート』

」

転移魔導具を使い、ダークナイトが姿を消す。その場に座るサラフに、リゼルが尋ねる。

リゼル「魔法とか専門じゃないからよくわかんないんだけど、どういうことなの？」

サラフ「分からない。あの男は何者なんだ？」

リゼル「さあね。よくわかんないけど、あんま好きくないなあ。」

ミア「そういえばリゼルとあの人、とっても仲悪そうなのです。」

リゼル「かなりの回数戦ったから。腐れ縁みたいなの？」

クルト「おい、飯の準備できたぞー。」

サラフ「…すまないが、先に食べていてくれ。私は奴の話を聞いてから行く。」

リゼル「りょーかい。いこ、ミア。」

二人を見送った直後、サラフの側にダークナイトが現れる。

黒騎士「許可が降りた。面倒くせえけど、教えてやるよ。『魔塔』  
がどついう物なのか。」

## 28 ぎもん（後書き）

リアルが忙しくなってきました。  
できるだけ更新速度キープしたいけれど・・・

## 29 はなし

黒騎士「教えてやるよ。『魔塔』がどういう物なのか。」

ダークナイトが地面にあぐらをかいて座る。亜空間から剣を取り出して見せながら言う。

黒騎士「例えばこの剣。魔導加工がされてる、所謂『マジックアイテム』って奴だ。

素材はオリハルコン。ここまで高価なもんがなんでこの塔の宝箱にあるか。」

サラフ「…普通ならば遺産、と答えるところなんだがな。確か、この塔のアイテムは

『補充』されるんだったな。つまりそんな物を供給できる状態にある訳か。」

黒騎士「理解が速えから助かる。でもな、供給つつたってこっからじゃ…。」

サラフ「交通手段が足りなさすぎる。つまり、この塔で『作られている』のか？」

黒騎士「本当に速えな、ったく。んじゃ、すっ飛ばして核心しゃべるぞ。」

剣を亜空間へしまい、サラフの目を直視して、言う。

黒騎士「…この塔は、ある『一人』の人間が『自らの為に』創り上げた。」

サラフ「人間が…一人だと!? 一体どうやって……。」

黒騎士「あいつは持ってたんだ。それが出来る膨大な魔力、そして

知識と技術をな。」

サラフ「……にわかには信じられない話だな。」

黒騎士「なら、この塔の天辺まで登ってみな。あいつに会えるぜ。」

サラフ「……言われずとも登るさ。本来の目的なんだからな。」

ダークナイトが立ち上がる。

黒騎士「がんばれよ。あいつも喜ぶだろ。何十年も普通の人間に会ってないんだ。」

サラフ「不老不死でも開発したのか、全く。…重要な事を聞いていなかった。」

黒騎士「ん？」

サラフ「この塔を作った目的だ。自分の為に作ったと言っても、住居ではないだろう？」

黒騎士「おめーなら言わなくても理解出来ると思ったんだけどな。」

サラフ「…？」

ダークナイトが亜空間から先程の剣を取り出す。

黒騎士「あいつは物作りが趣味でな、この剣とかも趣味でつくってんだ。」

『折角作っただから誰かに使ってもらいたい』とか言っ

てたな。

だが、実力に見合わない魔術具は災いを齎す。…もう分かっただな？」

サラフ「…この規模の建造物を、単なる趣味の公開場所の為に作ったのか…」

黒騎士「俺も最初は呆れたさ。もう慣れたけどな。それにしても、さっきから

美味そうな匂いがするんだが、晩飯、俺も喰っていいか？  
腹減ってきた。」

サラフ「リゼルが嫌がるんじゃないか？まあ、掛けあってみよう。  
話の礼だ。」

晩御飯はクリームシチュー。クロス特製だったそうだ。

翌日、リゼル一行はダークナイトの開けた扉をくぐり、21Fへの  
階段を登っていった。

## 29 はなし（後書き）

―おまけ―

黒騎士「おい猫！それは俺の肉だっ！返せっ！」

リゼル「隙だらけの君が悪いっ！あ、ちよっ、肉返せっ！」

### 30 がるだ（前書き）

30話突破っ！

これからもリゼルを宜しくお願いします！

### 30 がるだ

21F―

リゼル「ねえ、クルト。ここにいるのって確か…あの鳥だよね？」  
クルト「ん、そういや21Fはガルーダだったな。」

二人の会話を聞いていたクロスが、疑問を抱く。

クロス「ガルーダ…っておっきな鳥の魔物ですよね…？」  
リゼル「？…そうだけど？」  
クロス「こんな狭い塔の中で…力を発揮できるのでしょうか？」

魔塔の内部はそこそこ広い。部屋の直径は25弱、天井も8mはある。だが、所詮屋内。  
ガルーダの平均サイズは翼を広げた状態で9m弱。小さい個体でも6m程度だ。

クルト「この奴は狭い場所での戦闘に慣れてるんだ。気い付けとけよ。」

クロス「あ、はい。了解です。」

ミリア「来るですよ！ウォールスタンス！」  
その声と同時に5人は散開、戦闘態勢へと移行する。

強烈な風が先頭のミリアへ襲いかかる。タワーシールドを両手で構え、踏みとどまるが、

それと同時にガルーダが高度を下げ、姿を表す。元々、大した高さでは無かったが。

サラフ「強力なのを撃つから合図したら下がってくれ！」  
リゼル「りょーかい！」

ガルーダが地上すれすれで体勢を変え、滑空する。魔力を纏わせた翼が

5人を薙ぎ払わんとして、迫る。

ミリア「『ポイントガード』！」

盾を円錐状のバリアが包む。ミリアはガルーダの正面へ立ち、その攻撃を止めようと、

全力を込めた盾で防御する。バリアの先端とガルーダの嘴が衝突する。

ミリア「っ……！……クル……トさ……」

クルト「承知！」

少しずつ押し込まれるミリアの頭上を飛び超え、ガルーダの脳天へ巨大な刃が迫る。

が、ガルーダは急速に翼を羽ばたかせ、後退しながらも二人を吹き飛ばす。

ミリア「むぎゅっ！」

クルト「ぐっ！」

すぐさまに体勢を立て直し、魔力を収束させているサラフへと急降下す――

リゼル「させないよ。『シャイニングレーザー』！」

ガルーダの視界が一瞬、光に包まれる。その巨体が揺らぎ、悲痛な鳴き声が響く。

右目が潰された。その痛み到我を忘れかけているガルーダの左目を、更なる魔法が襲う。

クロス「僕だっています！」

サラフ「――詠唱終了、全員下がれ！『ジャッジメントスパーク』！  
！」

単純な電撃。それを前方へ放つだけの魔法。ただしその電圧は数百萬ボルトにも達する。

数瞬後、彼の手から放たれた稲妻は、余す所無くガルーダの身を焼き尽くした。

### 30 がるだ（後書き）

感想いただければ嬉しいです。  
ちよつと迷走しかけてます。

### 31 はこ？（前書き）

ちよつとえげつない…かな？

### 31 はこ？

リゼル「ん…これ、食べても大丈夫かな？」

ガルーダの丸焼きの側に座り込んでリゼルが言葉を漏らす。

クロス「…え？」

クルト「やめといたほうがいいぞ、あんま美味くねーから。」

リゼル「あ、そなのか。あいあい。」

クロス「……。」

22F—

サラフ「…宝箱…だな？」

ミリア「…宝箱です。」

22F、いつもならモンスターが居るはずの部屋には、宝箱しかない。

部屋の中央に威圧感を漂わせる宝箱にサラフとミリアは困惑していた。

リゼル「ミミック。宝箱に擬態するモンスターで、近づき過ぎると襲われます。」

宝箱を凝視していたクロスはその言葉にビクッ！と全身で反応し、宝箱から離れる。

クルト「外装は物理攻撃を弾き、魔法を反射する。そのままの破壊は不可能だ。」

だから、普通は誰かが囷になり、開いた瞬間に内部を攻撃するんだが……。」

リゼル「ぶっちゃけもつと楽な方法があったりする。裏技だけど。」

クロス「裏技……ですか？」

リゼル「うん。クロスはミミックが開いた瞬間狙撃できるように狙って。」

サラフは宝箱の『周り』にインフェルノ。直撃させたら反射されるから注意。」

クロス「あ、はい。」

サラフ「了解した。…煉獄より湧き出し業火よ、全てを焼き尽くしたまえ！」

リゼル「煉獄より湧き出し業火よ、全てを焼き尽くしたまえ。」

時間差で詠唱を始めたリゼルを見て、サラフが発動語のタイミングを合わせる。

サ&リ「『インフェルノ』……！！！」

宝箱を丁度避けるようなドーナツ状に、床から炎が噴出する。

二人分の魔力を喰らったソレは、高く燃え上がり、熱気を振りまく。

ミリア「…成程なのです。」

サラフ「呆れた攻略法だな。」

クルト「ちなみに最初に発見したのはリゼルだ。」

リゼル「出来るだけ楽しいもんね。危険を冒す必要が無くなるなら尚更。」

密閉された空間。ミミックの内部の温度は急激に上昇していき、その高温により  
生命活動を保てなくなる。直前、生存本能によりミミックはその口  
(?)  
を開き、熱の放出を開始する。…が。

炎の力を秘めた魔法弾がミミックの内部へと入り込み、爆発を起こした。続けざまに  
2発、3発と続けて放たれた魔法弾は、連鎖爆発を起こし、ミミックに止めを刺した。

クロス「なんか……本当、ごめんなさい……。」

### 31 はこ？（後書き）

余談・ミミックの中身

クロス「ミミックの中身ってどうなってるんだろう…」

リゼル「ダークマターから舌が生えたような感じがしいよ。」

クロス「…ごめんなさい、全然わかりません。」

そもそもそんな私の文章力じゃ表現できない。

32 ほね。(前書き)

1000ユニーク達成しました！ご愛読ありがとうございます！

## 32 ほね。

23F―

リゼル「さて、どうしようか。」

サラフ「厄介な相手だな……。」

5人の前に立ちはだかるのは、骨の竜、スカルドラゴン。焼き払おうとも、断ち切ろうとも、幾度と無く再生するその体は、数多の冒険者を苦しめてきた。その魔獣へ、リゼル達が今、挑戦する。

リゼル「私とサラフが神聖魔法で攻撃！クロスは余裕があれば攻撃に参加！」

ミリア「リゼルさんとサラフさんを援護！脚部を破壊して足止めするです！」

クロス「衝撃弾、撃ちます！」

ランチャーから放たれた白い弾、それは着弾と同時に強烈な衝撃を起こす。

ひるむ事無く腕を薙ぐするスカルドラゴン。ミリアの防御を押し切り、吹き飛ばす。

ミリア「うあっ……！！！」

開いた前線を埋めるようにクルトの斧が閃く。骨竜の左膝へ亀裂が走る。

サラフ「――掲げるは浄化の光！『ターンアンデット』！」

浄化の力を秘めた光が骨竜へぶつかる。アンデット系に大ダメージをあたえるこの魔法も

骨竜程の相手になってくれれば、大した効果は望めない。一発ならば。

サラフ「魔力の流れを絶やすこと無かれ、『リコールスペル・ターンアンデット』！」

その追撃と共にミリアが戦場へ復帰し、クルトが退きながら、攻撃を加える。

骨竜は神聖魔法へ脅威を感じ、優先対象をサラフへと変えるが、クルトの一撃が

それを許さなかった。左脚の関節が砕けた。数秒で再生するとはいえ、それは大きな隙。

クルト「そのまま畳み込め！」

サラフ「魔力の流れを絶やすこと無かれ、『リコールスペル・ターンアンデット』！」

骨竜の腕が光弾を弾く。弾いた際の僅かな隙を縫い、クロスの聖魔弾が骨竜を撃つ。

ミリア「ウォールスタンス！」

盾を地面に突き立て、サラフを守るように立ちはだかるミリア。脚の再生を終えた骨竜の攻撃は、サラフまで届かない。

サラフ「我が魔力を糧に、更なる力を生み出せ！『スペルブースト』！」

だが、唱えられたのは、今までと違う呪文だった。魔法強化。対象は、リゼル。

お気づきだろうか、リゼルが戦闘に参加していないのを。彼女は戦闘開始と同時に

骨竜の目をかいくぐり戦線から離脱し、詠唱を続けていた。一撃で決着を着ける為に。

リゼル「是…否、汝は全てを以て神聖であり、全ては混沌の否定。」

魔法強化の魔力を辿り、骨竜がリゼルに気づく。収束している魔力は膨大である。

最優先で排除すべき、と骨竜は判断する。だが、既に時遅し。

リゼル「汝の欠片、裁きの光。……此处に在れ、『セイクリッド・テンペスト』！」

部屋中、至るところに光が出現する。それは全て、神聖を秘めた槍

光が収まり、残されたのは、浄化と共に砕かれた骨の破片だけだった。

### 32 ほね。（後書き）

投稿おくれてしまい、すみません。

執筆中に寝落ちしてしまい、そのまま起きませんでした。ごめんなさいっ！

さて、本題に移ります。

1000ユニーク達成です！本当にありがとうございます！

折角なので記念企画をすることにしました。

その名も「十題噺」

先着十名様からお題を募集して小説にしてみようかと思っています。

応募方法と詳細は活動報告にて。ではです！

### 33 ぶるん

24F―

リゼル「ぶるぶる。」

クルト「喰えんぞ。さっさとスプーン置いて武器持て。」

リゼル「うう。」

5人の前にあるのは、プルプルとしていて、青く半透明の丸っこい物体、スライムだ。

その中心にある深い蒼色をしたコアが、それを裏付ける。決してゼリーでは無い。

サラフ「…襲ってこないな？」

ミリア「なんか可愛いのです。」

クロス「えっと…攻撃したら襲ってくるんだとおもいます。」

サラフ「なら、一撃で仕留めよう。―王の加護を受けし紅蓮の竜、  
汝は紅なり、汝―」

詠唱を始めるサラフ、だがスライムは動かない。…訂正、ぶるぶると動くだけだ。

クルト「あー、確かこいつには魔法が一切効かんぞ。」

サラフ「―なり、汝―何だとっ!？」

クロス「そんな…」

リゼル「打撃系も効かないから攻撃が通るのは私とクルトだけだね。」

「ミリア「攻撃は頼んだです。」  
クルト「じゃあ始める…ぜっ！」

大きく跳躍したクルト。その落下を利用し、加速した斧でスライムを狙う。

スライムを倒す手段は一つだけ。中心のコアを破壊すること。だが、重戦士であるクルトの全力を込めた一撃を以てしても、攻撃は届かない。

攻撃された事を理解したスライムは形状を変化させ、戦闘体勢に入る。

リゼル「地道に削っていくよ！」  
クルト「あいよ！」

立方体と化し、宙へ浮かぶスライムから、幾つもの魔法が放たれる。炎、氷、雷、岩、光、風、炎、風、水…連続して放たれる魔法が地面を抉ってゆく。

ミリア「リフレクトガード！」  
そのなかの一つ、風の刃がミリアの盾に当たり、跳ね返る。

リゼル「ちよっ、ミリアっ！？跳ね返しちゃだめ！」  
クルト「まずいな、全員集まれ！ミリア、全力で防御しろ！」

その刃はスライムへとぶつかり、吸収される。突如、スライムを囲うように風が渦巻く。

リゼル「深淵よ…『プロテクション』！」  
サラフ「彼の者に牙を向ける全てを拒め、『リジエクト』！」

ミリア「ウォールスタンス！『エレメントガード・”ウィンド”』」

！  
幾つもの防御魔法がミリアを覆い、それに隠れるように4人が並ぶ。

スライムが纏う風が一層強くなり…瞬間、弾ける。

それはさながら嵐の如く。数千もの風刃が、部屋中を埋め尽くした。

### 33 ぶるん（後書き）

お題の応募、待ってます。  
（ ・ ω ・ ）

### 34 びんち

暴風が収まり、轟音が鳴り止む。魔塔の一室に吹き荒れた嵐は、凄まじい物だった。

リゼル達5人の中で、立っていたのはただ一人しかいなかった。

クロス「リ……リゼルさん、ミリアさん！クルトさん達も！」

最後尾にいたクロスは奇跡的に致命傷を免れたが、他の4人の怪我は深刻である。

一刻もはやい治療が望ましいが、スライムは暇を与えてくれない。

クロス「っ！？」

後方から来る氷の槍を間一髪で躲すクロス。続け様に迫る魔法を避けるため、走る。

彼の置かれた状況は非常に厳しい。彼の武器は「魔銃」なのだ。

物理的な攻撃は殆ど不可能、攻撃手段は「魔法弾」のみ。

それをスライムに撃てば、先ほどと同じ事が起き、今度こそ全滅するだろう。

回復弾を撃とうにも、スライムの攻撃が許してくれない。まさに絶体絶命である。

クロス「届けっ！」

走りながらも、懸命に回復弾を飛ばすクロス。しかしそのすべてが撃ち落される。

クロス「そんな……うわっ!？」

次の瞬間、足元で爆発が起き、体勢を崩してしまう。

咄嗟に受身をとるも、どうやら足を痛めてしまった様だ。走り続けるのは困難だろう。

クロス「ど、どうすれば……あっ!」

その時クロスに浮かんだ考えは、「賭け」と呼ぶに相応しいものだった。

しかし、それ以外に手段が無いのが現状。彼は躊躇わず、実行した。

クロス「一か八か、いけえっ!!!」

両手の銃から、幾つもの回復弾が発射される。狙いは、スライムだった。

最初の内は攻撃魔法に相殺されていたものの、その圧倒的な弾数で、徐々に押していく。

そして、その一発が攻撃をすり抜け、スライムへとぶつかる。

直後、攻撃は止み、スライムが癒しの光を纏い始める

クロス「……やった!？」

その光は徐々に強まっていき、一層強い光を放った瞬間、部屋に癒しの霧が満ち溢れる。

脅威的な回復効果を持った霧により、リゼル達が意識を取り戻す。

リゼル「っ！………？」

サラフ「これは………」

クロス「皆さん！………よかった………」

クルト「油断するな！来るぞ！」

ミリア「『パワープロテクション』！」

スライムの魔法とクロスの中にミリアが飛び込み、光を帯びた盾で魔法を打ち消す。

リゼル「ここからが本番、だね………」

戦いは何も終わっていなかった。ただ単に、ふりだしに戻っただけなのだ。

クロス「………皆さん。僕、もしかしたら………攻略法を見つけたかも知れないです。」

### 34 ぴんち（後書き）

もどつてなかった。

### 35 きてん

クロス「……皆さん。僕、もしかしたら…攻略法を見つけたかも知れないです。」

リゼル「攻略法？」

クルト「ほう。」

クロス「……僕がスライムの動きを止めます。出来る限りの攻撃をお願いします！」

クロスはそう告げると、瞬時に組み立てた狙撃銃を構えて、癒しの弾を放つ。

スライムの魔法を隙間を綺麗に縫い、到達。スライムが攻撃を停止し、魔力を纏う。

リゼル「……！！ナイス、クロス！」

クルト「成程なっ……！」

攻撃が止み、相手は空中で動かない状態。此程の好機は無い。円環が、巨斧が、スライムのその半透明の身体を削ってゆく。だが、スライムの纏う光は強まり、拘束時間の終わりを告げる。

クロス「ー今だっ！」

一層強く癒しの力が光った。その瞬間、さらなる癒しの力がその中へと加わる。

すると、収束していた魔力は不安定になり、再びスライムの周りで安定を図りだす。

リゼル「クルト、ラスト任せたっ！」

クルト「任された！——奥義『一撃・分断！』」

魔力を放出させ、限界まで加速された巨斧がスライムの薄くなった防護物質を裂き

そのコアを捉える。次の瞬間には、硬質なコアは綺麗に真っ二つになっ

ていた。主を失った魔力が霧散し、スライムの身体が消滅する。

リゼル「ぐっじょぶ！」

クルト「だな。クロス、凄えぞ。」

ミリア「途中から防御も要らなくなっちゃったですね。」

クロス「いえ……たまたまですよ……。」

照れるクロス。とても恥ずかしそうに喜ぶ姿はとても可愛らしい。

サラフ「しかし、回復魔法まで倍返しするとは、知能が低いのか元々の体質なのか。」

リゼル「体質じゃない？知能が低くかったらあんなに魔術使えないだろうし。」

クルト「ともあれ、突破したんだ。よかったじゃないか。」

ミリア「そうです！」

リゼル「ミリアは自分の失敗をやむやにしない！……って言いいたいところだけでも。」

ミリア「うう……。……だけでも？なんですか？

「痛いところを突くリゼル。だが、ここれ思わぬ方向転換。

リゼル「『効かない』ってしか言わなかったクルトもクルトだよな。」

クルト「なっ！？そこで俺に来るのかよ！？……まあ。それは悪かったが。」

サラフ「私も効かないまでも、行動阻害くらいには撃とうと思っていたからな。」

クルト「お前も言うか！」

この後、少なくとも一時間は弄られ続けたクルトであった。

35 きてん（後書き）

スライム編が3話にも及ぶとは。びっくりだ。

36 うじ。(前書き)

10分程おくれてごめんなさい。

### 36 うし。

― 25 F

リゼル「……この階、か。」

小さな呟きだった。だが、クルトは聞き逃さない。

クルト「大丈夫か？」

リゼル「正直、怖い。流石に……ね。」

クルト「仕方ねえさ。お前はそれでも、立ち向かうんだろ？」

リゼル「まあね。いつまでも怯えてるわけには、いかないから。」

会話に気付いた仲間が寄ってくる。

クロス「どうしたんですか？」

サラフ「二人で何を話しているんだ？」

リゼル「んとね、この階の敵は2体いるんだ。」

クルト「ミノタウロス。たしか、大剣持ちと戦斧持ちだな。」

ミリア「そんなもの、この盾で弾ききって見せるですよ！」

リゼル「クロスはクルトと剣の方をお願い。ミリアとサラフは、私とでいいかな？」

クルト「構成はそれで問題ないだろう。最後に。…全員、敵の連携攻撃には気をつける。」

牛の魔物、ミノタウロス。ある程度の知能、かなりの筋力を持ち、個体によっては剣術等を習得しているものも居る。

リゼル達が今、対峙しているものは、2体のそれ。

紅の毛並み、白い大剣を持ったものにはクロス、クルトが。蒼の毛並み、黒い戦斧を持ったものには、リゼル、ミリア、サラフが。

各々が武器を構え、緊迫した空気が部屋を満たす。

リゼル「散開！」

その声と同時に全てが動く。ミノタウロスが声に反応し先制攻撃を仕掛けてきたのだ。

クルトは振り下ろされた大剣に自らの武器、巨斧をぶつけ威力を相殺し、

ミリアは振り上げられたばかりの戦斧に自ら飛び込み、盾で押しこむ。

リゼル「氷結を右に。雷光を左に。『デュアルエンチャント』！」魔法を込めた円環が、黄色と空色の渦を描きながら蒼牛に傷をつけてゆく。

サラフ「―貫け、全てを飲み込め！『カオティックスパーク』！」暗黒の雷が迸る。戦斧を盾に防ごうとする蒼牛。

だが、戦斧に当たった雷は、そこから更に暗黒の針をばらまいた。その内の幾つかが蒼牛を穿つ。

その一方で、紅牛も、幾つもの傷を負っていた。

攻撃は全てクルトに止められ、遙か遠くのクロスによる狙撃が正確

に自分を撃つ。

ミノタウロス達は、この冒険者達が一筋縄では行かないことを悟った。そして、

二匹の牛が、”同時”に咆哮する。それは、本気の証。細胞が活性化し、傷が僅かに塞がる。

本番は、ここからだった。

36 うし。(後書き)

リアルが忙しいです。早めに休止するかもしれません。

### 37 ほんき（前書き）

大変お待たせいたしました。

### 37 ほんき

咆哮後のミノタウロス戦は、壮絶さを増していた。

蒼牛が戦斧を振り上げる。斧の纏う闘気は、その動作すらも攻撃へと変える。

衝撃波がリゼル達を襲うが、そうはさせるかとミリアが立ちはだかる。

ミリア「ウォールスタンス！」

盾を地面へと突き立て、自らを壁とする防御の構え。

戦斧が振り下ろされ、斬撃が彼女を襲うが、決してその後方へ攻撃は届かない。

サラフ「猛き炎よ、吹き荒ぶ風と共に我が敵を討て！『インフィニットバーニング』！」

その背後から炎が意思を持ったかの如く蒼牛へと伸びる。

蒼牛は戦斧を地面から抜くと同時に炎を切り裂く。その斧にすら巻きつく炎を見た蒼牛は

瞬時にサラフへ戦斧を投げつけることで負傷を避ける。

サラフ「当たるか、『メタスタシス』。……っ！？」

簡単な転移により余裕をもって回避するサラフだったが、斧の軌道を見て驚愕し、叫ぶ

。  
サラフ「クルト！避ける！」

斧の軌道は紅牛と戦っているクルトへと向かっていたのだ。

迫り来る刃に気付いたクルトは巨斧を振り上げ、その遠心力で飛ぶ。

戦斧は対象を失ったかに見えた。しかし、それで終わり、なんて道理はなかった。

紅牛の大剣が振るわれ、戦斧を傾ける。ただそれだけで、その軌道は綺麗に反転する。

戦斧はいつの間にかサラフの側まで接近していた蒼牛の手に収まり、攻撃へ転じる。

サラフ「なっ！？」

ミリア「『ソリッドガード』！」

サラフの目の前にミリアが入り込む。右手に持つ大きな盾、タワーシールドが斧を阻む。

だが、咄嗟の防御。ミノタウロスの筋力から繰り出される力を防ぎきることはできない。

殺せなかった分の衝撃が二人を吹き飛ばす。

サラフ「ぐっ……『エアフィールド』！」

風を使って無理矢理空中で体勢を立て直し、再び蒼牛と対峙する二人。

着地した二人に癒しの魔力が降り注ぐ。クロスだ。

ミリア「回復ありがとうございます！……で、そろそろいいですか？リゼルさん。」

熾烈な攻防の中、リゼルはまたしても戦闘に混ざっていなかった。彼女の職業は円環使い。手数、そして多彩な魔法を武器とする職業。リゼル「うん。充分充分。準備万全だよ！」

天井から落ちてきたリゼルは、全身に様々な光を纏わせていた。

彼女は戦いの中、ひたすらに補助魔法を唱え続けていた。知っている限り全ての魔法を。

重ねがけの切れ味強化、幾つもの属性付与、数種類の防御膜、単純な筋力強化。

その全てが彼女を包みこんでいるのだ。色彩豊かな装甲に身を包んだリゼルは走る。

それは雷速にも及ぶ踏み込み。蒼牛は辛うじて反応する。だが、幾つもの魔法を纏う円環は戦斧の柄を容易く切り裂き、部屋に蒼牛の悲鳴を響き渡らせた。

### 37 ほんき（後書き）

定期考查が終わり、更新を再開することができます。

読者の方々を大変お待たせしてまい、本当に申し訳ないです。

これから出来る限りストックを作っておきます。それではまた次回。

### 38 やいば

リゼル「うつ……！」

前述の通り、ミノタウロスは知能と筋力という大きな特徴を持っている。

しかし、戦いにおいてそれらを更に上回る特徴がもう一つあるのだ。

タフネス。ただひたすらにタフなのだ。それ故に倒れない。

リゼルの一撃は確かに強力な物だった。現に蒼牛の腹部には大きな傷痕が在る。

だが、その攻撃は強烈なダメージを与えると共に、「痛み」の枷を斬ってしまった。

枷の外れた蒼牛は更なる攻撃を受けて尚、自らの攻撃を一切中断しない。

その為、リゼルは圧倒的なスピードと火力を持ちながらも攻撃を受けていた。

いくら防御魔法が掛かっているとはいえ、それには限界がある。

そう感じたリゼルは強行手段を決行した。

リゼル「さっさとくたばれえっ！」

大きく跳躍し、独楽の如く回転しながら蒼牛に向かい落ちていくリゼル。

円環には膨大な魔力が込められ、それはミノタウロスをも一撃で葬る程の力を秘める。  
正に必殺技。だが一瞬でも集中を切らせば、彼女自身も巻き込んでしまう危険な技。

―しかし、その軌道上に突如として、白の大剣が乱入した。

リゼル「っ!？」

腹部に叩き込まれる一撃。残った防御魔法を全て徹す程の渾身の力ウンターだった。  
まともに喰らったリゼルは、大きなダメージを負い、強く弾き飛ばされる。

しかし、リゼルは飛ばされながらも、手に握る円環に補助魔法全ての魔力を込める。

魔力をひたすらに込めて、込めて、込めに込めた円環を、蒼牛へ放つ。

対して紅牛は蒼牛を庇う様に立ちほだけり。大剣を振り下ろす事で円環を叩き落とす。

……はずだった。

リゼルの円環にはある条件を満たすと、魔力を開放させる性質がある。

込めた魔力が開放されるのは、対象を斬りつけた瞬間。  
厳密に言うならば、【衝撃】を受けた瞬間である。

大剣と円環が重なった瞬間、膨大な魔力の奔流がミノタウロス達を襲った。

リゼル「……やった、かな？」

クルト「リゼル！後ろだっ！」

警告を聞き取り、瞬時に背後を向くりゼル。

そこには全闘気、生命力を込めた大剣を掲げた紅牛の姿があった。火事場の馬鹿力。窮鼠猫を噛む。……追い詰められた生物は時に異常な力を発揮する。

紅牛が大剣を振り下ろすと、そこに込められた力が指向性を持ち、リゼンを襲った。

巨大な闘気の刃。それは強力過ぎるが故に直線的で、簡単に躲される様な無謀な攻撃。

リゼル「あ……。」

しかし、リゼルは動くことが出来なかった。過去の記憶が彼女の動きを鈍らせた。

——リゼルの意識は、そこで途切れた。

38 やいば（後書き）

シリアルになった。

じゃなくてシリアスになった。

### 39 まもれ（前書き）

遅れてごめんなさい。

今回は本編短めです。

シリアスなので差分にオマケがのってます。

### 39 まもれ

クルト「あいつ！気絶してんじゃねーか！」

そうクルトは叫び、それと同時に走っていた。だが、すぐに体勢を崩す。

彼はクロスの回復や援護があつたにしろ、紅牛と一対一で戦っていたのだ。

蓄積したダメージは相当な物だ。それに、例えそのまま走り、リゼルの元へと彼が辿り着けたとしても…満身創痍の彼にリゼルを助ける手段は無いだろう。

ミリア「二人共、あの攻撃の威力を少しでも削ぐです！」

そう言いながら、リゼルの元へ走るミリア。

サラフ「了解した！『シャイニングブラスター』！」  
クロス「は、はい！」

レーザーが闘気の刃を撃つ。少しずつではあるが刃が削れていくのが分かる。

更に、その刃の軌道上の地面がクロスの砲撃により凍結、氷柱が進行を阻み威力を削る。

その全てを退け、闘気の刃はリゼルへと、そしてその前に立ちはだかるミリアを襲う。

ミリア「二人共グッジョブです！『ピラミッドシールド』！」

声と共に盾を掲げると、ミリアのに前方に大きな四角錐の形をした魔力の盾が現れる。

それは攻撃を止めるのではなく、力を分散させ、逸らす防御。勢いを弱めた闘気の刃等、容易く受け流される。

ミリア「…ふう、なんとかなっただす。」

緊張が解け、その場に座り込むミリア。サラフとクロスもミリアの隣に座る。

サラフ「しかし、なんでリゼルは気絶したんだ？」

クロス「そ、そういえばいきなり…でしたね。」

クルト「…それについては俺が説明しよう。」

斧を杖代わりにゆっくりと3人の側まで来ていたクルトは、腰をおろすと真剣な眼で話を始めた。

### 39 まもれ（後書き）

おまけ・ほのぼの差分。 2話あります。

1.

無数の魔法に身を包み、虹色のオーラを身にまとうリゼル。

クロス「本当に色々な魔法知ってますよね、リゼルさん。」

リゼル「お、その声はクロスか。まあ、円環使いだしね。」

クロス「こ、声って…あれ、リゼルさんなんで目を瞑ってるんですか。」

リゼル「開けても補助魔法が邪魔で見えないもん。」

クロス「……。」

2.

盾を構え、様々な防御で味方を守るミリア。

サラフ「ミリアって、最近左手とか背中の中盾使わないよな。」

ミリア「防御役してるからです。この二つは攻撃用なのです。」

サラフ「しかし、盾だけでよく戦えるな。正直最初見たときは驚いたぞ。」

ミリア「そうでもないですよ？盾だっているんな種類があるのです？例えば―（ペラペラ

この後、サラフはミリアの盾講義に4時間付き合わされた。

## 40 かく。(前書き)

またまたおまけ付き。

## 40 かく。

ここは、どこかな。私、何してたっけ。

えっと…皆と塔に登って。確か…大きな刃が…。そうだ、大きな刃が…!!」

―大きな刃が、目の前を覆って。

- - -  
- - -  
- - -

クルト「11年前、あいつはここで、死にかけている。」

サラフ「死にかけた!? 一体何―」

クルトは手を出してサラフを抑止し、続ける。

クルト「さっきのアレで…な。そもそもあいつが番人始めた理由もそれなんだよ。」

仲間全員で助けようとしたが、間に合わなかった。力を使い果たしてたんだな。

塔の外に優秀な治療師がいたお陰で奇跡的に助かったけどな。

その後、一年間冒険者を休業して、あいつは俺に知らせてきた。

自分みたいに実力も無いのに無理に進んだら駄目だ……って。  
だから私が無茶する様な人が入れないように番人をするんだ……って。

6歳なりに考えたんだろうな。それからあいつはずっとこの島を出ていない。」

サラフ「そんな事が……。」

クロス「リゼルさん、そんな小さい時から冒険者を……」

話が終わり、自然と声が溢れる。

クルト「優秀だったよ、あいつは。ただ、一人で頑張り過ぎるのが欠点なのさ。」

ミリア「確かに、リゼルさんはもっと頼ってくれてもいいと思うです。」

クルト「お前らが優秀すぎるんだ。あいつの事だ、どーせ

「自分も仲間の役に立ちたい！」とかそんな事を考えてるんじゃないかな。」

[illegible]

違う。アレが目の前まで来たのは、ずっと昔だ。

今回は、まだ遠くにあったのに。簡単に避けられたはずなのに。

アレを見た途端に、体が動かなくなつて。……結局駄目だったなあ。

ここは、どこなんだろう。また、死にかけてるのかな。

皆に迷惑ばかりかけて……一体なんのために鍛錬してきたんだろう。今まで。

強くなつたつて、肝心な時に動けなかったら、意味ないのに。

…全然駄目だったな、私。

#### 40 かく。(後書き)

―おまけ

幼少時のリゼルと少し若いクルト。

リゼル「くると、勝負しよ！」

クルト「ん、いいぜ。」

そして。

一般人「うわ、あんな小さい子を……」「最低だな。」「誰か！あの子を助けてあげて……！」

リゼル「……ごめん、くると。」

#### 41 いま。(前書き)

今度おまけ集でも書こうかなと思っています。

## 41 いま。

サラフ「…もう、三日か。」

リゼルが意識を失い、目を覚まさないまま三日が過ぎた。

ミリア「食料もそこそ心配になってきたです。何階まであるか分からないですし。」

クロス「大丈夫でしょうか……リゼルさん……。」  
クルト「まったく……どうするべきか。」

-----

体の感覚は一切ないのに。思考だけがはつきりしてる。

どれだけ時間がたったんだろう。

………そういえば、番人始めた理由、『無茶する人を塔に入れさせない為』だっけ。

自分で無茶してちゃ笑うしかないね。

役に立とうと必死で頑張ってた。自分では全然気づけなかった。結局成長してないんだ。

.....  
「クルト「……登るぞ、この塔を。」

クロス「えっ？えと、リゼルさんはどうするんですか？」

クルト「持っていく。いずれ目を覚ますだろう。」

ミリア「4人で進むなんて無茶です！リゼルさんだって無茶したから……」

クルト「だから俺らも仕返しに無茶してやればいいじゃないか。」

サラフ「……屁理屈だな。だがまあ、いいんじゃないか？」

ミリア「サラフまで言うですか！……分かったですよ。ただし、進むのは一日一階。」

それ以上は流石に無茶過ぎるです。その条件つきなら私は大丈夫だと思うです。」

クロス「ぼ、僕も……頑張ります！」

クルト「んじゃさつさと進んで目え覚ましたリゼルを驚かせてやるーぜ！」

みんな「おー！」

.....

もう一度チャンスがあるなら。

折角頼れる仲間が居たんだ。今度は私に出来る事を出来る範囲で精一杯頑張ろう。

その為に、今は私にできることを考えておかなきゃ。

時間はいっぱい、あるんだから。

#### 41 いま。（後書き）

―おまけ

様々な魔法弾を駆使して戦う魔弾使い。

その魔法弾には撃つ際に自分で精製する即席型と、予め用意しておく消耗品がある。

クロス「威力の高い弾が少ないといざというとき困るからなあ……」

サラフ「何をしてるんだ？クロス。」

クロス「あ、サラフさん！丁度いいところに！弾に魔法を込めてもらえませんか？」

サラフ「ふむ。魔法を込める……。こういう形式なのか興味がある。教えてもらえるか？」

探究心旺盛なサラフの質問攻めに会い、その日は魔法を込めてもらう事が出来なかった。

## 42 みらい

4人は、リゼルの意識が戻らないまま、塔を登っていた。

クルト「フォーメーションε、準備はいいか！」

4人で出来る、最高の作戦を考え、合図を決め、万全の準備を整えて、挑む。

クロス「装填OKです！」

一人の欠員はとても大きかった。それでも、立ち止まる訳にはいかないから、挑む。

サラフ「こっちも大丈夫だ！」

ミリア「準備万端なのです！」

欠けた仲間が戻ってきた時の、居場所を守るために、4人は、挑む。

クルト「……いくぞ！」

彼らにとって未知の敵である、インテンションウェポンへと向かって。

- - - - -

思い出した。私が冒険者に成る前から、ずっと得意だった事。

魔力コントロールだ。それが得意だから円環使いになった。冒険者になった。

自分が必要とされている、自分を居場所があると信じて、冒険者になっただ。

なのに私は自分の特技を忘れていた。当たり前のように使い過ぎていて。

次、皆と一緒に戦えるなら。それを使おう。私だけにできる事を。攻撃はサラフとクルトに任せればいい。補助や回復はミリアとクロスで充分だ。

そう、私のやるべき事は……

——くそっ、ミリア！大丈夫か！

——もう限界です！うぐっ……

あれ？……この声は、クルトと、ミリア？

——あと少しで、大きいのが来ます！僕じゃ防ぎきれません！

——私も無理だ！時間が無い！

——くそっこんなところでっ……！

そっか。……皆が、ピンチなんだ。……今、やらなきゃ！……今すぐ、行かなきゃ！

- - - - -

ミリアの盾は既に限界を突破している。にも関わらず目の前の敵は、先程膨大な魔力を収束させ続けている。正に絶体絶命だった。

クルト「くそっ、だめだ……全員防御しろ！」

クロス「お願い、耐えて！簡易結界、最大出力！」

サラフ「内なる力よ、我に仇なすものを退けよ！」マジックシールド『！』」

魔力は収束を終え、巨大な光線となってサラフ達へと放たれる。その時だった。

―エア・レイグ・フィールド！

突如響いた声と共に、無数の風が光線を切り裂き、軌道を逸らす。

声の発生源には、一対の円環を手にした猫獣人の女の子が、涙だらけの笑顔で立っていた。

リゼル「待たせてごめんね？みんな！」

## 42 みらい（後書き）

シリアr……シリアス終わり！  
次からバトルパートです（多分）

### 43 へいき

クロス「リゼルさん！」

サラフ「リゼル！」

クルト「ったく… やつと気がついたか、リゼル。遅えぞ。」

リゼル「私はいいから、ミリアを治療してあげて！」

クロス「あ、はい！」

4人の元へ駆け寄り、戦闘態勢を取るリゼル。

リゼル「それに、あいつの相手もしないといけないでしょ？」

この階層の敵は、これまでとは違い、無機物であった。

リゼル「クロスはそのままミリアの治療を。クルトとサラフは攻撃、私が援護する！」

魔道機械科学の産物、インテンションウェポンシステム。通称IW S。意思を持つ兵器。

考え、学び、成長するソレは正に究極の兵器であった。此処に在るのは小型とはいえ、幾度も冒険者を撃退してきたはず。それだけ成長していると考えられるだろう。

クルト「なら、援護しっかり頼むぜ！」

サラフ「私は詠唱破棄で手数を稼ぐ。火力は任せたぞ！」

クルト「おうよ！」

二人が跳躍し、敵へと接近する。それを撃ち落そうと、幾つもの銃弾が放たれる。

一つ一つが実弾、尚且つ魔力コーティングがされている強力な攻撃である。

リゼル「『エア・レイグ・フィールド・フルコントロールモード』」

しかし、如何に強力な攻撃でも、当たらなければ意味は無い。吹き荒れる風が銃弾の軌道を変え、真空の刃が発射口を破壊する。

サラフ「喰らえ、『デュアルショット・アシッドブラスト+マグネティック・ボム』」

大量の酸弾と磁力を秘めた魔力弾の同時発射。どちらも機械には致命打となり得る攻撃。

当たり前の様にその軌道上にシールドが展開される。

だが、そのシールドに攻撃は当たらなかった。

無数の風が酸弾を、魔力弾を運び、それらはホーミングも真つ青の華麗な軌道を描く。

サラフ「これは……!?!」

拡散する磁力場の影響で数瞬、インテンションウェポンの動きが乱れる。

クルト「……『無転・激昂刃』。――はあああああつ!」

その隙を逃さず、クルトの巨斧は弧を描いた。全力の一撃。シンプ

ルな攻撃だった。

だからこそ、対策の仕様もなく、確実な攻撃。  
それは分厚い装甲を切り裂き、衝撃と共に内部を粉碎する。

クルト「……やった、か？」

サラフ「……まだ、の様だな。」

彼の目には、炎に身を包み、体を溶接・修復する敵が写っていた。  
突如、機械音声が響く。

IWS「固定型インテンションウェポン・システムコードIWS -  
KALIN。

ワタシハ『カリン』。貴方達ヲ強敵ト認識シ、コレヨリ全  
力デ撃退シマス。」

### 43 へいき(後書き)

カリンは固定型IWSです。動けないけど多数の装備を持っているんじゃないでしょうか？

#### 44 かりん（前書き）

なんか高速展開になってしまった。

## 44 かりん

幾つものレーザーが大地を穿つ。バラバラの軌道を描く光の線は、ゆっくりながらもリゼル達5人の位置を確実に追尾していた。

クルト「……くそっ、近づけねえ。」

サラフ「これはまずいな。『フレアライン』！」

さらにそれと同時に無数の弾幕、そして幾つもの砲弾が部屋を埋めつくしている。

近づくどころか、避ける事すらも困難な状況だ。

サラフの放った爆撃が負傷中のミリアを庇う様に弾幕をかき消す。

クロス「こっち治療終わりました！！援護感謝します！」

ミリア「ミリア復帰です！！」

回復が終わり、即座に二人はその場を離れる。二人を狙うレーザーがその空間を穿つ。

リゼル「みんな！弾幕と砲撃は何とかするから、レーザーだけに注意して！」

ミリア「ならレーザーは私がどうにかするです！」

クロス「援護します！」

魔銃から放たれた魔法弾がクルトとサラフ、ミリアに収束し、3人の身体能力を強化する。

クルト「それなら俺は突っ込んでやんよ！」

サラフ「了解した！…その姿を不変とする絶対なる氷結よ、鋭利なるその力の片鱗は―」

二人を襲う弾幕を、風の道が退ける。その突破口からクルト、サラフの二人は走る。

カリン「防御システム起動―『トライフィールド・S/D/M』  
『ポールアーム』」

音声と同時にカリンの周囲に3重のバリアが展開、さらに放出された二つの鉄球が

カリンを守るように高速回転し、防御を固める。

クルト「厄介な……」

クロス「バリアブレイクッ！」

展開されたバリアが砕ける。魔力弾は勢いを緩めずに二つ、三つとシールドを粉碎する。

サラフ「―此处に或る全てを包め。『ゼファー・オブ・グレイシア』  
！――」

全てを凍てつかせる風が吹く。

カリン「迎撃システム起動―『フレイムキャノン』」

リゼル「ああもう！ミリア、サラフをお願い！」

迎え撃つ様に放たれる火炎弾。しかし、更なる風が氷の風をその軌道から消す。

ミリア「了解です、『ロングレンジガード』！」

サラフへと迫っていた火炎弾は突如現れた魔法の盾により防がれる。

ミリア「レーザーもこれで防いでたですよ？ついでに鉄球も止めといたです。」

その言葉に鉄球を見れば、幾つもの盾がその回転を強制的に止めていた。

そして、風がカリンを包む。それは絶対零度。それは風と言う名の永久凍土。

カリンを包むものは徐々に氷へと変わり、その動きを停止させる。

クルト「んじゃ、今度こそ終わりだな。『粉碎一閃』」

砕く。その為の一撃。巨斧が閃き、カリンは氷と共にその形を崩していった。

#### 44 かりん（後書き）

戦闘描写あうあう。

私と同じお題で書いた三題噺を友人がUPしてくれたので良ければ読んでみてください。

私の <http://ncode.syosetu.com/n7797s/>

友人の <http://ncode.syosetu.com/n1536u/>

## 45 ぜんや(前書き)

サブタイトル修正。ぜにゃってなんだよ

## 45 ぜんや

―30F・宝箱の間

魔塔の30F、そこに佇む宝箱には最上級のマジックアイテムが眠っている。

サラフ「あ、この杖貰っていいか。」

リゼル「みんな武器違っし適当に持ってっていいんじゃない？」

クルト「お前、相変わらず無欲だな……冒険者なのに。」

リゼル「今は冒険してません。番人してます。」

ミリア「それは屁理屈です。……ってこのバックラーは！」

クロス「魔銃は流石にないよねー……あ、これなら使えるかも。」

それぞれが思い思いに宝箱を漁って行く。そんな中、突如として懐かしい声がかかる。

黒騎士「よー。本当にここまで来るたあー、ちょっと驚いたぜ。」

リゼル「むっ、ダークナイト！なんでアンタが此処に。」

黒騎士「悪いか？まあ、悪い知らせ持ってきた訳じゃねーから怒んなよ。」

クルト「なんか知らせに来たのか？」

黒騎士「この塔は、あと3Fで終わりだ。」

ミリア「!!!!」

黒騎士「でもって、敵が出るのは次で最後。だから実質次の階で終わりだ。」

クロス「!!!!」

ダークナイトの言葉にミリアとクロスは驚きのあまり、硬着する。

黒騎士「んじゃ、せいぜいドラゴン戦、がんばれ。あばよ。」

サラフ「……ふむ。最後の敵は、ドラゴンなのか。」

リゼル「ネタバレするだけして行っちゃったよあいつ……」

呆然とするリゼル達を、更に驚かせる声が響く。

カリン「ツンデレナンデスヨ、彼ハ。」

声の方向には、所々に繋ぎ目の見える、女の子。

サラフ「この声……まさか、IWSか？」

クルト「音声は同じだな……確かに砕いたはずだが。」

カリン「貴方達が倒シタノハ私ノ戦闘機体デス。コノ身体ハ生活機体デス。」

IWS-KALINハ幾ツモノ機体ニ意識ヲリンクサセテ

イマスカラ。」

サラフ「……そんな技術まであるのか……」

リゼル「魔塔って謎だらけだねえ。」

クルト「番人が言うな。」

カリン「ドラゴンハ、強敵デス。デスガ、頑張ッテ下サイ。

ソレガ出来タナラキット、マスターモ喜ブデショウ。」

激励の言葉を残し、去っていくカリン。その背中を見届けたあと、リゼルは言った。

リゼル「……次で最後、か。……なら今日は食材全部使っちゃおうか。」

みんな「そっちかい！」

#### 45 ぜんや（後書き）

決戦前夜。のわりにはまったりしています。

それと、1000ユニーク記念の十題晰が完成しましたよ！  
良ければ読んでいってください。

## 46 みらん

リゼル「うわ、ドラゴンが居るらしいだけあって天井高いねー。」  
クルト「お前は緊張感を持て。」

サラフ「……部屋の外からですら、とてつもない魔力を感じるな。」

魔塔31F。その塔全ての魔物達の頂点に君臨するのは、  
春を司る竜：ミストラルドラゴン。

どこまでも広がる草原を連想させる、穏やかな緑色をした身体は、  
ドラゴンにしてはとて小小さく、せいぜい人間二人程の高さしか無い。

だが、それは季節の一つを司りし竜。その魔力量は尋常ならざる物  
であった。

春風竜「よくぞここまで辿り着いたものだ。小さき者たちよ。」

ただそこに或るだけで他を圧倒する存在、ドラゴン。

一行は、その存在を前にして、呆然と眺めることしかできなかった。

春風竜「レディーをジロジロ見るのはマナー違反だぞ？まあ、冗談  
だがな。」

リゼル「む、冗談なのか。ならばずっと見つめてみよう。」

ただ、リゼルを覗いては。

春風竜「……ほう。我が魔力に吞まれず、冗談を交える余裕すら持つか。」

リゼル「それなりに覚悟はしてきたからね。……この塔と、仲間のおかげかな。」

サラフ「……全く、ドラゴン相手にもいつも通りだな、リゼル。」  
ミリア「リゼルさんですから、仕方ないです。」

春風竜「さて、ここまで来たからには、この先に進みたいのだろうか？

……我が名はミラン。此処を通りたくば、主らの全力を以て我を倒してみせよ！」

クロス「き、来ます!!！」

ミリア「ウォールスタンス！」

ミランと名乗ったドラゴンの咆哮、そして魔力の開放。

その音圧と魔力だけで5人は誰一人、その場に留まる事が出来なかった。

クルト「これが、ドラゴン……。」「  
ミリア「少しも防げなかった……。です……。」「

ミラン「とまあ、今のうちに我が本気を出しては元も子も無いだろう。条件をつけようぞ。」

主らは全力を以て、我が身体に傷を付けてみせよ。それが出来れば主らの勝ちだ。」

背中の翼を羽ばたかせ、そう告げるドラゴンの言葉に、5人は立ち上がる。

サラフ「情けないものだ。だが、そこまで言われたら引き下がれん。」

ミリア「どうにかして、傷……貴方につけてみせるです!」

クロス「僕に、どこまで出来るか分からないけど……諦めたく、ないから……!」

クルト「やってやるよ。折角此处まで来たんだからな。」

各々が想いを吐き出し、ドラゴンに向けて武器を構える。

リゼル「絶対に勝って見せる。どんな手を使ってでも!」

最後の戦いが、始まる。

#### 47 はる。(前書き)

指摘があつたので、あらすじに注意書きを追加しました。

## 47 はる。

リゼル「まずは……『エア・レイグ・フィールド』！」

魔力が展開され、このフロアの風、全てをリゼルが支配する。

ミラン「風を支配する魔術か…面白いが、我には通じぬ。『ウインデー・クラティア』。」

しかし、ミストラルドラゴンは春風の竜。風の扱いで他の生き物が勝つことは到底不可能。

ドラゴンが持つ膨大な魔力が奔流となり、リゼルの魔術をかき消し、上書きしてゆく。

クルト「行けっ『虚空・斬月』！」

クロス「え、えっと、『デイスベル・チャフ・グレネード』！」

巨斧から生み出された三日月状の闘気が、弧を描きミランへと飛んでいく。

魔術の風がそれを妨害するが、散布されたデイスベルの魔法が魔術ごと風をかき消す。

だが、その攻撃は竜の持つ強固な鱗を徹す事が出来ず、弾かれる。

ミラン「さて、こちらからも行くぞ。『ミストラルブレス』。」

ミリア「……っ！『マインドプロテクション』！」

春の祝福がりゼル達へふりそそぐ。安らぎは睡魔となり襲いかかる。それにいち早く気付いたミリアが全員に精神障壁を張り、それを凌ぐ。

サラフ「―全ては零へと帰結せん！『アポステリオリ・コンゲラート』！」

ミラン「もう暫く浴びてれば穏やかに眠れたものを。『ウォーム・ウィンド』。」

絶対零度の暴風は、温かい春の風に包まれ大気へと溶けてゆく。

リゼル「……まずいつ！サラフ、下がって！」

サラフ「っ！『メタスタシス』！」

ミラン「遅い。『バインドプラント・シーリングアース』。」

転移よりも早く、大地から伸びた蔦が彼を捉える。球状の魔法陣がサラフを包む。

数瞬後、それは一際大きな輝きを放ち、無数の蔦と共にその場から消失する。

クロス「サラフさん！」

クルト「くそっ！『降魔乃一閃・断空』っ！」  
ミラン「『サークル・レイ』。『シャイニング・トウ・エグザイル』」

巨斧を垂直に掲げ、全闘気、全魔力をそれに込めるクルト。

クルトを囲む様に降り注いだ光線が、掲げられた巨斧を無情にも叩き落す。

クルト「すまん、リゼル……。」

更にその光はクルトを覆う光条となり、巨斧を地面に残したまま、クルトを封印。

彼と共にこの空間から姿を消した。

ミリア「あんな一瞬で二人も……信じられないです。」

ミラン「我は春を司りし春風の竜。その魔力性質から、封印は得意なものだな。」

封印魔法。対象の身体と精神を魔力で包みこみ、他空間へと封じ込める高等魔法技術。

突如、強烈な殺意がミランを飲み込んだ。その気迫に、彼女は少し驚いた様に翼を動かす。

リゼル「クルトとサラフを……。二人を……。返せつ……。!!!」

ミラン「ほう。ならば、その想いを武器にするが良い。自らの手で取り戻してみせよ!」

#### 47 はる。(後書き)

圧倒的に力で余裕を見せつけるミラン。  
おまけでの扱いをどうしようか迷ってます(え

#### 48 なかま（前書き）

遅れてごめんなさい；

ミラン「我は情けなどかけぬぞ。仲間が大切ならば、自らの手で取り戻してみせよ！」

その言葉と共に咆哮が響き渡る。だが、リゼル達は怯まない。やらなければならない事があるから。その想いが彼女達を強くする。

リゼル「自らの手で？……違う。私にはまだ、仲間がいるよ！ミリア！クロス！B連携！」

ミリア「……はいです！」

クロス「い、行きます！『獣化くビーストアウト』！」

ミリアはタワーシールドを投げ捨て、クロスはその姿を狼へと変える。

刹那、クロスの爪がミランの目前を掠める。

ミラン「速い……！それが主らの本気か！……ならば——  
リゼル「もう、何もさせない。」

ミランは攻撃体勢に入るが、背後に殺気を感じて咄嗟に回避行動へ移る。

つい先程まで彼女が居た場所で炎が爆ぜる。

ミラン「なかなかやりおる。だが――  
ミリア「『ウェイヴ・インパクト』です。」

衝撃波がミランを襲い、巨体が宙へ舞う。  
ギリギリ防御が間に合ったようで、魔力壁がミランを包んでいた。  
しかし、もう彼女には喋る余裕などない。既に獣化を解いたクロスの銃口が視界に入る。

クロス「バリアブレイクッ！」

リゼル「『紅蓮の舞』。」

魔力壁を魔法弾が砕き、炎の連続攻撃がミランへと襲いかかる。

様々な角度から来る連続攻撃を避けきろうとも、その先には、ミリアの姿。

ミリア「『フォースレーザー』です！」

盾から伸びる光線の上を、ミリアの後ろから現れた狼が走る。  
道無き道を足場にした、神速の連撃。咄嗟に魔力壁で防ぐが、待っているのは、衝撃波。

ミリア「『ウェイヴ・インパクト』！」  
リゼル「『マジカル・ブラスター』！」  
クロス「もう一度、バリアブレイクッ！」

防御ごと吹き飛ばされた先に、百の魔法弾を構えるリゼルの姿。その百の弾全てが、彼女のコントロール下にある。

これは通常、多数を目眩ましに一部を当てる為の魔法である。だが今、リゼルはその魔法弾全てを完全に制御しきっていた。それは正に、戦場の芸術。

ミラン「……まさか、追い詰められるとはな。お見事。」

避けきれないと悟ったミランが動きを止めると、魔法弾は全て、一点へと着弾していく。

収束した先、背中にある鱗の一枚が、碎ける。

地上へと降り立ち、にこやかに笑いながらドラゴンは言った。

ミラン「約束だったな、我に傷をつけた汝らの勝利だ。素晴らしい戦いだっただぞ。」

#### 48 なかま（後書き）

当たらない様に必死になってただけで、実力の1割程度で捌いていたミランさんなのです。

## 49 あるじ

ミラン「さて。……道は開かれた。この先に何があるのか、確かめてくるがいい。」

彼女の言葉と共に、階段への扉が開かれる。その向こう側には、見慣れた仲間の姿。

クルト「悪いな。脱落しちゃって。」

サラフ「心配かけたな。すまない。」

リゼル「おー、元気だったか。」

特に感動も無い再開を済ませて、階段を登る。

その道中は、今までの階段を全て合わせたほどに、長い距離に感じた。

実際に他の階段よりも少し長かったのだが、伏せておこう。

リゼル「ついに、魔塔を攻略したんだよね……。」

見慣れた魔塔の扉。しかし、この先に魔物は、いない。

ミリア「そう言われても、あんまり実感沸かないです。」  
クロス「な、なんか緊張してきました……。」

リゼルがゆっくりと歩みより、その扉を押す。

少し力をいれただけでそのまま扉は開き、中からの光のせいで視界がぼやける。

扉が開ききった直後、パンパンパン！と連続した破裂音が鳴る。

リゼル「うわっ！？……って。」  
クルト「……クラッカー？」

ひらひらとした紙やビニール製の紐が服に絡みつく。

黒騎士「おめでとう。お前らは初めての魔島攻略者だ。」

カリン「才疲れ様デシタ。向コウノテーブルニ料理ヲ並ベテ主ガ待ツテオリマス。」

ピクッ

料理と言う言葉にリゼルが。主と言う言葉にはサラフが反応する。  
分かりやすい反応に他の3人は苦笑しつつ、案内のまま奥へと向かった。

そのテーブルにはこれでもかと言う程に料理が所狭しと並べられて

いて、

その一つの席に薄い青色の髪をした少年が座っていた。

少年？「お疲れ様です、攻略者の皆様。どうぞ、席にお座り下さい。」

リゼル「イエス！……と、まあ。予想は付いてるけども、貴方は……」

少年？「ご察しの通り、この塔の創造者、トライスト・レプトルと申します。」

気軽にトラスとでも及び下さい。……料理が冷めてしまう前に頂きましょうか。」

リゼル「……そだね！」

料理を口に運びもぐもぐうまうまとし始めるリゼルに続いて、全員が料理を食べ始める。

クルト「お、酒もあるじゃねえか！」

クロス「ミリアさんの、それ美味しそう……僕にも取ってください！」

ミリア「ん、クロスも食べるんです？盛るですから、皿渡すですよ。」

サラフ「……で、説明はしてもらえるのか？『創設者』さん。」

トラス「……わかりました。まずは……私について、少々お話しし

ましょ  
うか。  
」

## 49 あるじ（後書き）

章の終わりが見えてきました。

ここで皆さんに一つ質問があります。

章完結後、技紹介等を挟んだ後、次章に移ろうとおもっているのですが

- ・ 技紹介
- ・ 登場人物紹介

の他にやって欲しい物があれば教えてください。  
善処します。

## 50 トラス（前書き）

なんと、もう50話です。

## 50 トラス

トラス「僕は、森の中で生まれました。いえ、意識を持ったときは森の中でした。」

捨てられたのでしょうか。僕の魔力が高すぎたためだと思いません。

冒険者の平均魔力を10とすると、僕はその時から数百万の魔力を持っていました。

そんな化物じみた僕を拾ってくれたのが、ミランでした。」

リゼル「ミランって、下の階に居たドラゴンさんですか??」

トラス「そうですね。彼女は命の恩人……というか、親みたいなのです。」

……彼女は僕を育ててくれ、10歳の頃に大都市の魔法学校へ入学させました。

僕は魔法の才に恵まれていたのか、魔法学校を一年で修了し、研究を始めました。」

サラフ「その際に立てた研究施設……という訳か?」

トラス「はい。そういう事です。次は『魔塔について』ですね。」

先程言ったように、ここは元々研究施設として建てた物です。

ですが、マジックアイテム等を創っていくうちに、ある欲求が生まれました。

『自分の創った物を使って欲しい』。そう思うようになったんです。

しかし、身に余る力は使う人を滅ぼしてしまいます。そうでしょう?」

クロス「魔力暴走起因性狂気症候群……でしたっけ? 覚えてないです。ご、ごめんなさい。」

トラス「正確には動魔力暴走起因性精神障害症、ですね。

ともかく、どうにかして実力を測る必要があっただんです。僕は旅をして、各地の魔獣、魔物に契約をしてまわりました。

自らの担当する階へ人が来た際、此处に召喚されてその者と戦うこと。

そしてその召喚システムを構築し、宝箱を置き、魔塔の門の封印を解きました。

それがこの魔塔の正体です。あ、ダークとはその時に知り合っただけですね。」

話を終え一息つくトラスに、更なる質問が投げられる。

ミリア「じゃあこの地下にある遺跡もしかして、トラスさんが作ったんです?」

トラス「あー……うん。バレちゃってるんだ……えっと、

今、大規模なダンジョンを創ってるんだ。君らの戦闘を見てるのも楽しいけど、

多対多の戦闘とか見てみたいし。良かったら遊びに来てよ。僕のダンジョンは一応死ぬ危険もないし、気軽に来てくれると嬉しいな。」

リゼル「……死ぬ危険が無い？それって…　どゆこと？あと、口調が素に戻ってるよ。」

トラス「う。やっぱり丁寧語は疲れる……。じゃあこのまま話そうかな。

暇で、ずっと見てるから。それに、研究中もカリンが建物にリンクしてるし。

危ないときは回復魔法かけに行くから。自分の道楽で人が死ぬのは嫌だし……。ね。」

クルト「ちよつと待て。10年前にリゼルはこの塔で……。まさか！」

トラス「お久しぶりです。あの時の治療師は僕ですよ。まあ、変装してましたけど。」

あ然とするリゼル、クルトの二人を見ながら笑うトラス。

トラス「今日はここに泊まっていてね。まだ、話は色々あるし…  
…ね？」

トラスだけでなく黒騎士やカリン、ミラン（人形態）まで混ざり、お泊り会が開催された。

## 50 トラス（後書き）

50話です。びっくりです。

正直ここまで続けられると思ってませんでした。

ここまで続いてきたのも読者の皆様のお陰です。

いつも読んでくれる方々。

なんとなく読んでくれた方々。

本当にありがとうございます。

これからも塔の番人リゼルを宜しく願います。

## 51 たいか

枕投げの激戦を乗り越え、朝がやってくる。

サラフ「……いい話が聞けた。今度試してみるとしよう。」

トラス「いや、こつちとしても他の魔術師の意見が聞けて良かった。」

サラフ「ん、リゼル達が起きてきたみたいだな。」

トラス「だね。じゃあ、朝食を用意してくるよ。」

そう言つてトラスが姿を消すと、起き出してきたリゼル達がぞろぞろと登場する。

ミリア「サラフさん、起きるの早いのです。」

リゼル「ほら、老人の朝は早いつてよく言……」

サラフ「そこまで年取つてないわ！」

クロス「サラフさん幾つなんですか？」

サラフ「こつ見えて32だ。老け顔で悪かったな。」

クルト「俺より下か。つてか年食つて見えるのは口調のせいもあるだろ。」

サラフ「むう……。」

皆がサラフで遊んでいるうちに、トラスが戻ってくる。

トラス「さて、お話ししたいことが有ります。朝食を摂りながらでも聞いてほしい。」

指パッチンが鳴り響き、テーブルに次々と料理が現れる。

リゼル「おー！朝なのに豪華だー！もぐもぐうまうま。」

トラス「お金には困ってまないからね。ご飯くらいは美味しい物を食べてるんだ。

さて、君達には対価を用意しようと思うんだ。それと、『鍵』も渡さないかね。」

ミリア「鍵？それに、対価ってなんです？」

トラス「塔を最後まで登ってきてくれたからね。大変だったでしょ？

だから、そのお礼。僕特製の武器を作ってあげようかと思っ  
ってね。

それと『鍵』は途中の階を飛ばして此処まで来るための道具だよ。」

リゼル「てことは、いつでも食べに来ていいの？」

クルト「おい。」

リゼル「いたづ。叩くことないじゃんかー！」

トラス「あははは。さて、武器の相談もあるから、後で33階の研究室に来てね。

で、ここからが本題かな。……リゼル、正式に番人になってくれないか？」

リゼル「もぐもぐまっm……え？」

51 たいか（後書き）

―おまけ―

サラフ「どんな口調なら老けて見られないのだろうか……」

リゼル「ほら、一章の初登場の頃とか。あれ面白かったよ。」

サラフ「それは……黒歴史と言っか……。」

リゼル「えーと『ふっ、大魔術師の器、このサラフ』ネグレスが闘ってやるっ！』だっけ？」

サラフ「思い出させるな！やめろ！」

だれにでも きっとあるはず 黒歴史

## 52 そして（前書き）

お待たせしてしまいすみません。  
魔塔攻略編最終話です。

## 52 そして

リゼル「正式に……番人？」

トラス「そう。魔塔全体のシステムを改善しようと思ってるんだ。  
一回行ったことのある階までのショートカットとか色々、  
その管理をして欲しい。」

それと……25Fのミノタウロス兄弟が引退するから、そこで戦ってもらいたいかな。」

リゼル「あ、う？……ん。落ち着いた。えと、管理って私でも出来る？それに、引退て……？」

トラス「実家のダンジョンが忙しくなってるらしいよ。だから魔塔を抜きたいんだって。」

それに管理もそこまで難しい訳じゃない。君が適任だと思うたから誘ってるしね。」

リゼル「……条件があるよ。聞いてもらえるなら、番人になってあげる。」

視線と共に一瞬の念話。その条件を聞いて、トラスは笑う。

トラス「あははははは、きみらしいや。わかった。これからよろし

く頼むよ、リゼル。」

—それから1ヶ月後。

リゼル達の活躍により、魔塔の正体が明かされ、地下遺跡の正体も判明。

冒険者ギルドで一躍名を広めたになった彼女達は、パーティーを解散し、それぞれ別々の生活を送っていた。

クルト「ふう。この辺りの魔物は手ごわいな……。」「  
ミリア「依頼だから仕方ないです。魔塔の事で少し有名になっちゃったです。」「

冒険者としての生活に戻った者……。

クロス「今日で山籠り一ヶ月……。か。皆は何をしてるんだろっとな……。」「  
それにしてもこの銃、威力高すぎて制御が難しいよ……。トラスさん……。」「

新たな武器と共に、己を磨く者……。

サラフ「……ふむ。理論上はこれで完成する……だがそれに伴う消費魔力の問題は……」

メイド「サラフ様、以前お探しになられていた魔道書が手に入つたと連絡がありました。」

サラフ「何！？すぐに行く。どこだ？」

ある研究者の背中を追いかけて、ひたすらに魔導を探求する者。

そして……

冒険者「暫く見ない間に門ができてるなんてな……」  
リゼル「魔塔へようこそ。カードは……持っていないみたいだね。このカードをどうぞ。」

再び番人に就いた者。

リゼル「んじゃ魔塔のシステムの説明おわり。わかんないこと会っ

たらいつでも聞いて。」

冒険者「便利になったもんだな。説明ありがとよ、行ってくるぜ。」

リゼル「ふう。……あの人じゃ7階で限界、かな？」

冒険者の背中を見ながら呟くりゼルに、突如声がかかる。

トラス「ご飯持ってきたよ。仕事頑張ってくれてるね。」

リゼル「楽しくやってるよ。……私はやっぱり、この魔塔の事が大好きだったみたい。」

、  
終わらない非日常は無く、世界は少しずつ形を変えていく。けれども  
忙しい思い出と一緒に生まれた新しい日常は、いつも通りに今の時  
間を刻み続けていた。

## 52 そして（後書き）

こんにちは。

作者です。

ついに魔塔攻略編が終わりました。

読んでくれた方本当にありがとうございます。

暫くの間休憩を挟んで、新章を移りたいと思っています。  
休憩中に技紹介や人物紹介、裏設定（風の）世界観紹介  
などを予定しています。

よければこれからも『塔の番人リゼル』を宜しくお願いします。

## 第二章 技紹介（前書き）

書いてて思ったんだ……

これ、誰得だよ。

そう。本編6話分くらいの長さの技紹介なんて誰が見るんだよ！  
という事で、なんかもう……読まないことを推奨します。

本当に暇な時にボーっと読み流す程度でお楽しみ下さい。

## 第二章 技紹介

ミラン「我的出番が少ないぞ。」

トラス「いきなりそんな事いわれても。」

ミラン「と、言うわけで技解説の進行を務めるミランだ。」

トラス「同じく進行役のトラスだよ。」

カリン「カリンデス。私ノ出番モ少ナイト思イマス。」

黒騎士「ダークナイトだ。お前ら45話でチラツと出てきた時懐かしいと思っただろ。」

トラス「まあまあ。」

カリン「ソレデハ、マズメインキャラノリゼルサンカラ紹介シテ行キマス。」

トラス「あ、第一章の技解説にでた技は割愛してるから、よろしく。」

### ・リゼル

グラビティスクエア

前方に重力の影響が大きくなる範囲を作る中級魔法。

一度発動すると暫く持続するので立ち回りやすくなる。

アースウェイヴ

大地を歪め、土の波を生み出す中級魔法。

17話では自分の真下の土を波にすることにより発生した窪みで攻撃を回避した。

チェンジ

円環同士の座標を入れ替える空間転移魔術。円環に術式が刻まれている。

円環に触れていれば術者ごと転移させることができる。

ちなみに転移可能範囲はせいぜい2、30メートル程度。

ピアスランス

盾、バリアなどに対抗するべく編み出された下級攻撃魔法。

無機物に当たると形を崩す魔力の槍を撃ち出す。

その魔力は無機物の表面を伝い反対側にたどり着き、その後槍を再構成し飛んでいく。

無駄に習得が難しい上使いどころも難しい。が、覚えておいて損はないと言われる魔法。

ブレイクフレア

武器に魔力を込め、打撃と共に爆発を起こす魔法技術。

詠唱が必要だが、爆発に指向性を持たせているため威力はかなりの

マナインパート

他者に魔力を分け与える魔法。

インフェルノ

地面から灼熱の炎を噴き上げる中級魔法。

離れた位置からの不意打ちにも使える。

セクリッド・テンペスト

辺り一帯に浄化の力を持つ光の槍を大量に生み出し、対象に収束させる上級魔法。

普通に高威力の攻撃だが、アンデット系の敵には更に高い効果が見込める。

ちなみに熱では無く衝撃による攻撃である。

デュアルエンチャント

2つの武器に別々の属性を纏わせる補助魔法。

双円環や二刀流だけでなく、前衛二人に同時にかける事も出来るため、意外と人気。

過剰強化

自身にあらゆる補助魔法を重ねがけしまくるリゼルの（ある意味）最終奥義。

攻撃補助の魔法は攻撃する度に、防御補助の魔法は被撃する度に弱まる性質を持つ為  
長期戦には向いていない。又、身体にかかる負担が大きく解除して暫くは動けなくなる。

フルエンチャントショット

過剰強化により纏った魔法を魔力に再変換し、武器に込めて撃ち出す奥義。

過剰強化している時なら何時でも一瞬で撃つことが可能で、最後の一撃に使われるが、本当にピンチの時しか使わない  
武器が着弾すると、その周囲に魔力による斬撃と打撃の嵐を生み出す。

エア・レイグ・フィールド

周囲に魔力を張り巡らせ、空気の流れをコントロールする魔法技術。  
大量の魔力全てを立体的に意識しなければ維持できない為、  
ほぼリゼル専用の技である。

レア・レイグ・フィールド フルコントロールモード

空気の流れを更に精密にコントロールできるが、本人の動きが制限

される。

### 紅蓮の舞

円環に炎を纏わせた連続攻撃。魔力による炎が攻撃の隙間にうち出される為、

反撃されにくく長い拘束時間を稼げる攻撃。円環使いの基本的な技らしい。

### マジカルブラスター

百個の魔法弾を周囲に生みだし、一斉射撃を行う下級魔法  
通常は魔法弾の内9割は通常弾、1割をコントロール弾にすることで  
目眩ましと攻撃を同時に行う魔法なのだが、  
リゼルはその10割をコントロール弾で構成し、完全に制御して使用する。

黒騎士「終盤は無茶苦茶な魔法が多いな。」

ミラン「しかし、あの魔法弾には驚いたぞ。流石に避けきれん。」

トラス「うん、思考の百分割は僕でもきついよ。出来なくはないけど。」

カリン「私モ処理出来マスヨ。マスター、今度システムヲ作ツテモラエマセンカ？」

トラス「おっけー、やってみるよ。えーと次は……」

ミラン「第一章から地味に出ているサラフという奴だ。」

黒騎士「あの魔術師か。んじゃ、VTRスタート。」

・サラフ

サンダーランス

弾速・威力に優れた雷の槍を撃ち出す下級魔法

ピアシスランス

リゼルの項参照の事。

ブライトネスレイ

相手の上空に光を集めて落とす中級魔法。  
時間はかかるが威力は高い。

エクスプロージョン

指定位置に爆発を起こす下級魔法。

メタスタシス

一瞬で指定位置に転移する下級魔法。  
移動出来るのは5メートル程度でしかなく、  
壁の向こうなど物理的な障害がある場所にも行けない。

リジェクトエリア

魔力の壁をつくりだす中級魔法。

具体的には魔力により外部からの干渉を拒む空間を創りだす魔法。  
水準以下の攻撃は一切通らないが、それ以上の攻撃は軽減すら出来ず、

どんなに魔力を込めても防御力が上がらない為、使いどころを選ぶ。

ブリザード・レイ

周囲の無機物を凍てつかせる波動を放ち、

同時に氷の礫で相手を全方向から攻撃する上級魔法。

マナインパート

リゼルの項参照の事。

シャッジメントスパーク

超高電圧の電撃を前方に放つ上級魔法。

生命体を焼き焦がし、機械を内部から破壊する恐怖の攻撃  
と思いきや単純すぎてとっても防がれやすいので使いづらい魔法である。

ターン・アンデット

アンデットを解呪する下級魔法。

そもそもアンデットという物はもともと魔術により発生するものなので

中級魔法のデイスペルでも同じような効果が得られる。

リコールスペル

直前に発動した魔法を再利用して放つ中級魔法。

消費魔力は発動する魔法に依存するが、詠唱は固定。

スペルブースト

対象となる魔法に魔力を乗せることでその威力を上げる下級魔法。

リジェクト

リジェクトエリア（上述）のバリア版。対象一人を包み込むように  
防御する中級魔法。

その形状から攻撃を逸らす様な役割を果たす。  
リジェクトエリアと名前や原理は似ているが、使用状況は大きく異なる。

カオティックスパーク

暗黒の力を放つ上級魔法。

最初は雷の形状をしているが、着弾後無数の暗黒針となり渦巻くように周囲を攻撃する。

インフィニットバーニング

対象をひたすらに追い続ける炎の帯を放つ上級魔法。

切り裂かれども、吹き飛ばされども、形を再構成し再び襲い来る炎は脅威だが、

水等により簡単に消されてしまったためそこまで使える魔法でもない。

エアフィールド

空気を瞬時に集め、緩衝材とする為の下級魔法。

魔術師ならば咄嗟に使えて当然と言われる、戦闘においての必須魔法。

マジックシールド

魔力を密集させて障壁を作る下級魔法。

込めた魔力に比例して強度が増すため、リジェクトよりも高い耐久性を持たせる事も可能。

デュアルショット

二種類の射撃系魔法を完璧に同時に放つ為の魔法技術。

連射する様な魔法も全段同時発射するという特徴を持っている。

アシッドブラスト

強力な酸の球を連射する中級魔法。

デュアルショットを介すことで全段同時発射した。

マグネティック・ボム

着弾と同時に周囲に磁力の嵐を生み出す魔法弾を放つ中級魔法。使いどころが限られていて滅多に見ることは出来ない。

フレアライン

直線上に連続した爆発を起こしていく中級魔法。

威力は無いが、手前から押し出すように爆発していくので、距離を取ったり物を運搬したり（丈夫なものに限られるが）できるらしい。

ゼファー・オブ・グレイシア

絶対零度に及ぶ冷気を含んだ風を操り対象を凍結させる上級魔法。冷気を風により閉じ込める事で周囲への被害を最小限に抑えつつ最大限の攻撃力を生み出した、サラフ渾身の創作魔法。

アポステリオリ・コンゲラート

ゼファー・オブ・グレイシア（以下ゼファー）の亜種。

ゼファー開発中、失敗作として出来た上級魔法である。

対象の周辺に絶対零度の風を爆発させるようにばら撒く。

魔術の構成自体がゼファーと違うので、風を制御することはできない。

黒騎士「多すぎるだろ！」

トラス「本当にね……」

うん。書く前にどのくらい技があるのか調べてみて絶望したよ。

ミラン「後先考えずに書くからこうなるのだ。」

本当にね……。

カリン「次ハ、ミリアサンデス。」  
ミラン「盾の娘だな。あの装備でなかなか攻撃的なものよ。」  
黒騎士「あいつ、盾に魔法陣仕込んでやがるからな……。」  
トラス「それじゃどうぞー。」  
うう、もう書きたくないよ……

## ・ミリア

### デイスペルサークル

魔力を掻き乱す魔方陣を起動させ、射撃系の魔法を打ち消す。  
いつも背負っているラウンドシールドに刻まれている。

### スタンブレイク

意識を失わせる事に重点を置いた電撃を流し込む。  
電圧はあまり高くないため外傷を付けずに相手を無力化できる。  
ターゲットシールドに刻まれた4つの魔方陣の一つ。

### ブライトチャージ

光をタワーシールドに纏わせて突進する。  
防御と攻撃を両立させた攻撃であるため、1：1の戦闘では主力となる。

### アイソレーション

盾を時間軸から隔離し孤立させる。  
剣や槍など物理的なものから魔法弾などまで盾に触れているもの全て止める事ができる。  
ただし生命体は止められない（止められたら自分も止まる）  
発動中は盾が動かせなくなるのが欠点。

ウェイヴ・インパクト

盾から強烈な衝撃波を放つ。

シンプルな為様々な応用が効き、攻撃として用いれば防ぐことは困難である。

ターゲットシールドに刻まれた4つの魔方陣の一つ。

ウォールスタンス

タワーシールドを地面に突き立て、力押しで耐える姿勢を作る。

実際に突き刺すわけじゃなくて、魔力により地面との摩擦を極端に大きくしている。

リフレクトガード

盾にある程度の下級魔法を跳ね返すコーティングをかける。

エレメントガード

盾に宣言した属性に対する防御力を上げるコーティングをかける。

パワープロテクション

盾に魔力を緩衝材として纏わせ、衝撃を緩和させる魔法技術。

ピラミッドシールド

魔力で四角錐の形をした盾を構成し、正面からの攻撃を逸らす。

面の攻撃に対して絶大な防御力を誇る反面、点や線の攻撃に弱い。

39話で防いだのは魔力の刃だったが、幾つかの攻撃との相殺により刃としての鋭さが失われていた為、容易に逸らし切ることができた。

ロングレンジガード

小型の盾を魔力で創りだし、遠隔操作する魔法技術。

複数創りだすこともでき、便利なのだが防御力はあまり高くない。

フォースレーザー

レーザー状の魔力を前方に放つ、特殊な魔方技術。魔方陣から放たれているため、レーザーの方向をいつでも変えることが出来る。

魔力自体に攻撃性は無いが、相手の攻撃を相殺することはでき、基本的には咄嗟の遠隔防御等に使用する。

48話ではクロスが手足（狼形態な為両方足だが）に魔力を纏わせることで

レーザーを足場にすることができた。

トラス「はい、お疲れ様。」

黒騎士「防御ばっかかと思ったらそうでもねーな。」

カリン「技ノ使用回数ハ防御ガ圧倒的ニ多イデスガ、種類ハソコマデ多クナイヨウデス。」

ミラン「あの狼との連携は素晴らしかったな。よくもまあ足場をきれいに動かせたものだ。」

黒騎士「信頼のなせる技ってか。……ケツ。それより、4つの魔法陣の後一つって何だ？」

トラス「僕が見るに、自己回復の様子だったよ。ソロ用じゃないかな？」

カリン「作者ガ萎エテルノデサツサト進メマスヨ。」  
次はクルトかくぞー（棒

・クルト

アースクエイク（もどき）

地面に斧の石突を叩きつけ、周囲に衝撃波を発生させる。地震は  
こらない。

本人はアースクエイクと言っているのでアースクエイク（もどき）  
と呼ばれている。

デュアルショック

闘気を斧にまわせ叩き込む、斧による衝撃と闘気による衝撃の時  
間差攻撃。

斬らずに衝撃だけを伝える技術が必要なため、両刃の武器での使用  
難易度は高い。

奥義『一撃・分断』

斬る事だけに重点を置いて全力の一撃を放つ。

無駄のない関節の動きで大量の闘気を込めた斧から繰り出される必  
殺の一撃

無転・激昂刃

力を抜いた状態から放つ、居合に似た全力の一撃。咄嗟に放てるの  
が魅力。

粉碎一閃

闘気を乗せた斧を掠らせて、その威力だけを衝撃として伝える技。

虚空・斬月

闘気を刃にして飛ばす。

ミラン「ん？これだけか？」

トラス「しかも…説明が雑というか……」

そっいうもんなんだよ！クルトはー。

かりん「5000文字二達シヨウトシテイマス。」

黒騎士「……急ぐか。次は銃のガキだな。」

・クロス

ビーストアウト

獣人なら訓練すればだれでも使える。獣としての力を一時的に強めてその姿をとる。

リゼルやミリアも使うことができる。

シヨット

さまざまな特徴を持つ弾を発射する。今まで使ったのはこんなかんじ  
フレイム・バレット 炎の魔力弾を撃ちだす。  
フリーズ・バレット 氷の魔力弾を撃ちだす。着弾箇所を氷漬けにする。

インパクト・バレット 着弾時衝撃を発生させる魔力弾を撃ちだす。  
セイント・バレット 神聖な力を込めた魔力弾を撃ちだす  
ヒーリング・バレット 回復の力を込めた魔力弾を撃ちだす。

マジックシヨット

魔法のこめられた専用の弾を撃ち、魔法を扱う。

これを使用して21話でグラビティースクエアを発動させた。  
グラビティースクエアに関してはリゼルの項参照。

ブレイク

ショット・マジックショットからの派生技。

着弾する前に込められた魔力・魔法を発動させることができる。

リミットオーバー・レインボーブラスター

勢いに任せて自分の周囲に大量の魔法弾を発生させ片っ端から撃ちまくる超連射攻撃。

転移を繰り返す弾、壁で跳ね返る弾、幾百もの変則攻撃が対象を襲う。

基本的に暴走時しか使用しない。

デイスペル・チャフ・グレネード

特製の魔力攪乱爆弾を投げる。技名は咄嗟に思いついたもので、本人はあまり気に入っていないらしい。

バリアブレイク

文字通り、バリアをブレイクする。

誰でも使える技ではあるが、魔力（もしくは闘気）を溜めている間は無防備になるので

近接職には好まれず、遠距離攻撃で使われる事が多い。

黒騎士「次は俺だな。」

トラス「ごー。（長い……）」

バリアブレイク

25話でリジエクトエリアを破るときに使用。

詳しくはクロスの項参照。

暗黒剣之壱・地走り

剣を振り上げると同時に闇の斬撃が地面を這う。

5WAYの斬撃なので牽制に便利。

暗黒剣之？・次元波

剣を空間の狭間に滑らせて辺り一帯に斬撃を放つ暗黒剣。

作者もよくわからんが前方80度、5mまで攻撃できるらしい。  
ちなみに発動する前にクロスに止められた。ダッセー

暗黒剣之拾・影柱

闇の柱を発生させる。しばらく残るので相手が戦いづらくなる。  
けど技名を叫ぶ暇すらなくクロスに止められた。

暗黒剣奥義之壱・黒龍居合

居合で前方に巨大な闇の刃を放つ。普通に強い。

シャドウランス

闇の槍を放つ初級魔法。特記すべきところはない。

黒騎士「俺雑じゃね!？」

ミラン「気にするな。次はカリンだ。」

・カリン

M C L 魔力砲 ( M a n a B r a s t S y s t e m - M a g i c a l C r a s h L a z e r - )

周囲の魔力をエネルギーにレーザー砲を放つ。溜めが長い分単発での威力はカリンに搭載されている攻撃システムのなかでも最大級。

弾幕

20mm砲を40箇所から秒速10発程度で連射する。魔法弾ではなく実弾。

追尾レーザー

5つのビットを射出し、ターゲットをゆっくり追尾するレーザーを常に放出し続ける。

トライフィールド・S/D/M

3つの障壁を展開する。外側から順に 物理 両立 魔法 に対する障壁である。

ポールアーム

巨大な金属球を自身の周囲に巡回させ、自動で攻撃を防ぐ。

フレイムキャノン

巨大な火炎弾を放つ。クールダウンが必要な為あまり使用しない。

カリン「ヤハリ適当デスネ……」

トラス「いや、細かい説明が出来ないんじゃないかな。攻撃自体は

単純だし……」

カリン「ソウデスカ……マスター、モット複雑ナシステムヲ下サイ……」

トラス「うーん……もっと単純なの一杯つくって並列起動したほうが強くないかな？」

ミラン「ほらそこ、関係ない話をするな。」

黒騎士「んじゃ次はミランか。」

## ・ミラン

ウィンディー・クラティア

周囲の風を操る魔法。

春風を司るミランだからこそ成せる技であり、リゼルのエア・レイグ・フィールドと

比べても、風そのものを操るこちらが高位であり、優先される。

ミストラルブレス

柔かな春風に相手を包みこみ、眠らせる。

眠らされたが最後、ミランが許可するまで起きる事は出来ない。

バインドプラント・シーリングアース

鳶で対象の動作を封じ込み大地の力で封印する上級封印魔法。

春風の齎す安眠は封印に近い性質を持っているので、ミランは封印魔法全般が得意である。

サークル・レイ

対象の周囲を囲う様に光の柱を落とし、行動と視界を封じる中級魔法。

シャイニング・トゥ・エグザイル

光属性の魔法から派生して発動する上級封印魔法。

強い光を媒体に周囲の空間を歪め、対象を亜空間に閉じ込める。

レーザー系の魔法から派生することで遠距離からの封印も可能な強力な魔法。

トラス「ふう……やっと終わったね。」

うん。本当に疲れた。

黒騎士「6700文字……本編7話分か。」

ミラン「だな。」

それを言わないで！自分で書いてて「これ誰得？」とか思ってるんだから！

カリン「自覚シテルンデスカ……」

えっへん。まあ、そういう訳で、技紹介は終了となります。

トラス「これからもよろしくねー！」

## 第二章 技紹介（後書き）

ちまちまと書いてたけども……ながかったorz本当に……

## 第二章 武器紹介（前書き）

ごめんなさい。更新全然してませんでした。  
ほんとごめんなさい。

## 第二章 武器紹介

と塔の番人リゼル、武器紹介コーナー！パチパチパチー。

……。

……。

……。

……ねえ、何このノリの悪さ！？作者が一人で盛り上がっても虚しいだけだよ！

さて、リゼルに出てくる武器、適当に紹介してるだけで詳しいことが全く不明。

ということと今のうちに紹介しておこうという訳。

双円環<デュアルリング>

円環使いが使う武器。リゼルの使っているのは直径80cm、幅4.5cm位の輪っか状で、

外側が全て刃になっている。攻撃の際は基本敵に内側に指をかけるから

遠心力で扱いますが、手袋に金属を仕込んで持つのが一般的。怪我するし。

魔力伝導率の高い素材で作られていて、魔法の補助にもなる。

また、円の中心に魔力を溜められるよう円環にルーンを刻んでもあるのも特徴。

一撃一撃が軽い分、魔法や技で戦う武器である。

## スタッフ

両手持ち用の魔術杖で、魔法や魔術を補助してくれる武器。サラフが使っているのは、魔力伝導率の高いミスリル製で、先端には表面にルーンを刻んだ丸いルビーがはめられている。ちなみにこれで殴りながら戦う魔法使いもいるらしい。逞しい。

## 魔銃

魔法を込めた弾を装填して魔力を消費せずに様々な魔法を放つ事のできる武器。

基本的に銃口に直接魔力を流しこむことで、様々な属性の魔法弾を即席で放つ

という使い方が多い。グリップに付いたスイッチで放つ魔法弾の属性を変更できる。

魔法をこめた弾は高価な物が多い為、迂闊に連射すると大赤字になる。ご利用は計k(ry

双銃型、ライフル型(組立式・スナイパー仕様)、ランチャー型の3種をクロスは所持している。

## 巨斧

でっかい斧。でもって両刃。柄の長さが2m、刃の広さは上下に50cmくらい。

全長250cm、半端なくでかい。

体感重量が軽減される魔法がかかっている。それでも重い。重量を活かした一撃必殺の攻撃を得意とする武器。

あと切るといふよりは叩く武器。

## 盾

攻撃から身を守るための道具。

ミリアは背中にラウンドシールド、左手にターゲットシールド、右手にタワーシールドと2つ所持している。

### ラウンドシールド

直径80cm程の円形の盾。ディスプレイサークル魔方阵が刻まれているマジックアイテム。

発動中は中級程度の魔法を無反動で打ち消す事ができるが、魔力消費が激しくあまり持たない。

### タワーシールド

横80cm、縦180cm程の長方形の盾。

防御力は3つの中で一番高く、しっかりと攻撃を受け止めるタイプの盾。

### ターゲットシールド

直径35cm程の円形をした小型の盾。

小さな攻撃を弾く目的で使われる。

また、魔方阵が4つ重ねて刻まれているマジックアイテムで、4種類のスキルを発動させられる。

## 第二章 武器紹介（後書き）

自分でも読むのが面倒くさいです。  
じゃあ書くなよ・・・

需要あるといいなあ

## 第二章 登場人物紹介（前書き）

これで寄り道はおわりです。 次回より第二章となります。  
お知らせなどがありますので 目次よりお読み下さい。

## 第二章 登場人物紹介

リゼル「第二章登場人物紹介こーなー！」

マトラ「こーなー！じゃねえ！俺の出番どこだああああ！」

ソロン「リゼル！私と再戦だ！」

リゼル「懐かしキャラうつさい！出番などない！」

マトラ「なん……だと……」

ソロン「くっ……やはり俺では、無理なのか？」

リゼル「無視無視。んじゃ、さくさくいこー！」

リゼル（17） 猫獣人 ♀

職業： 円環使い<リングマスター>

武器： 双円環<デュアルリング>

好きなもの： 食べ物

嫌いなもの： 面倒事

備考： 7歳の頃から魔塔の番人をしている。

その頃から25Fまで進む程の実力者である（5人パーティー時）

毎日の食事は来訪者からの買い付けや魔物狩り。

だったが、いまはトラスから食べ物をもらっている。

朝の鍛錬は欠かさず、真面目に見えて結構適当。気まぐれ。現在はトラスの勧誘により魔塔の番人、もとい受付嬢のよ

うなものをしている。

また、魔塔25Fで冒険者達を見極める為、たまに戦っている。

サラフⅡネグレス（32） 人間 ♂

職業： 魔術師

武器： 両手杖

好きなもの： 魔法・魔術

嫌いなもの： 見下される事

備考： 魔法大好きな魔術師。自称「大魔術師の器」

……改め、普通に魔術師をしている。

魔法、魔術の研究の為に魔島を訪れたが、成り行きで魔塔を攻略する事になった。成果は出たようだが。

まだ不安は残るが、個人戦も強くなってきた。

ミアアロロセクト（22） 羊獣人 ♀

職業： 守護騎士<ガードナイト>

武器： 盾×3

好きなもの： 寝る事

嫌いなもの： 虫系

備考： ギルドでの依頼を中心に生活する、一般的な冒険者。

なぜか語尾に「です」がつく。

盾3種類を巧みに操り戦う。この時点で一般的では無いが気にしない。

途中からガードしかしていないように見えて実はメンバー全体の立ち位置などを

微調整している影の実力者。

真正面からの攻撃で彼女に防げないものはあんまりない。

クロスライグル（14） 狼獣人 ♂

職業： 魔弾使い<バレットマスター>

武器： 魔銃三種（双銃 狙撃銃 携行砲型）

好きなもの： 水遊び

嫌いなもの： 人前

備考： 基本的に人が多いギルド内が苦手で、滅多に見れないレアな子。

基本どこかで魔物を少しずつ倒して報酬をもらって生活している。

今回は興味本位で魔塔攻略に参加した。

身長140cmと小さい事をコンプレックスとしていて、

暴走状態になると、超高密度の弾幕を無意識に繰り出す。その後魔力枯渇を必ず起す。そして本人は覚えていない。

クルトメルギース（35） 人間 ♂

職業： 重戦士

武器： 巨斧

好きなもの： 酒

嫌いなもの： 姑息な物

備考： 昔リゼルがパーティーを組んでいたメンバー。

対人戦が得意らしく、闘技場やコロシウム等で稼いだりもしている。

リゼルの事を色々と気にかけていたらしく、  
彼女が過去を振り切れた事にほっとしているらしい。

トラス（??） ??? ♂

職業： 魔術士？

武器： ???

好きなもの： 研究、創作

嫌いなもの： 面倒くさい事

備考： 魔塔の創設者であり、驚異的な魔力の保持者。

見た目は20歳程だが、実年齢は定かではない。

マジックアイテムを作るのが好きで、日々魔塔の頂上で研究を重ねている。

この頃の日課はリゼルへの食事配達。

ミラン（??） ミストラルドラゴン ♀

職業： なし

武器： なし

好きなもの： 春風

嫌いなもの： 冬

備考： 幼少時のトラスを拾った春風の竜、ミストラルドラゴン

最上階へ登る為に通る最後の試練を受け持っている。

彼女に認められる程の人格者でない限り、魔塔を登り切ることはできない。

また、人間に近い形態をとることも出来るので、食費削減の為普段は

人間形態で生活している。

ダーク（??） ??? ♂

職業： 黒騎士

武器： 剣、槍、盾等

好きなもの： ラノベ

嫌いなもの： リゼル

備考： トラスの友人であり、20階の試練を受け持つ者。

黒い鎧兜の中の素顔は……秘密である。

リゼルと喧嘩するのがここ最近の日課。

「思ったよりいい奴」「憎めない存在」的立ち位置なことに不満を持っている。

カリン（??） 機械 ♀ 人格

職業： なし

武器： 各種武装パーツ

好きなもの： トラス

嫌いなもの： なし

備考： インテンションウェポンシステムを搭載した戦闘型マシンではなく、トラスの作ったインテンションマシン

周囲の環境すべてから情報を学び、成長していく一つの人口生命体である。

幾つもの機体でコアをリンクさせた状態で起動しており、人間型、兵器型、そのた多数の機体にメイン意識を移動させて動く。

リゼル「おーわりーい！」

マトラ「え？ちよっ、いつの間に！」

ソロン「……ここでハメを外し過ぎると次章の出番が危ういな。黙っておこう……」

リゼル「いや、最後のトークくらい話そうよ。」

ソロン「ん？そうか。……長かった第二章もこれまでだな。」

マトラ「俺らの出番なかったけどな！」

リゼル「まあ次章からは会う機会もあるかも知れないからね。」

ソロン「これからリゼルをよろしく頼む！」

マトラ「もうおわりかよ！では……」

リゼル「黙れ。」

マトラ「ぐはあっ！」

リゼル「それじゃ、これからリゼルをよろしくおねがいします！」

## 第二章 登場人物紹介（後書き）

長かった第二章もおわりです。

次からはもう少しまとめられるといいなあ。

さて、ここで注意書き。

お知らせを幾つか載せているので、お読み下さいますようお願いします。いろいろ書いてます。多分。

ま それではまたー

## おしらせ

リゼルは過去の壁を乗り越えて、成長したようです。

これからは魔塔以外の世界も見ていくことになるでしょう。

さて、この「塔の番人リゼル」。ワード1ページ等という変な制限をかけて書いてきました、

しかし、このままではいかんと思うのです。

毎日焦りながら書いていては原稿のクオリティが落ちたりバラツいたりするのです。

作者もちよっぴり成長したいのです。

ということで

これから、

- ・ 台詞の前のキャラ名を表示しない。
- ・ 1話あたりの文章量を増加
- ・ 更新間隔を週1前後の不定期に
- ・ サブタイトルをひらがな三文字から卒業

したいと思います。

もしかしたら1〜52話の方もまとめて編集、調整するかもしれません。

が、とりあえず今は続きを書きたいと思っています。

これからもリゼルを宜しくお願いします。

### 53 ある旅立ちの日（前書き）

新装開店（？）です。まだちょっと慣れてないかも。

### 53 ある旅立ちの日

「これでよし、っと！」

荷物の入ったリュックを閉め、その声を漏らしたのは、リゼル。普段は魔塔の門番、（通称：受付係）をしている彼女だが、今日は特別な日だ。

「島の外にでるなんて何年振りだっけ……？」

「7歳の頃からずっとここにいるよ、リゼルは。」

リゼルの独り言に、丁度朝食を運んできたトラスが答える。

朝食だと言っのに、リゼルの前に置かれた皿の量はトラスの3倍近い。

「景色とか全然変わっちゃってるんだろっなー。」

「ま、ゆっくりしておいでよ。ここにはいつでも戻ってこれるんだし。」

「色々みて回ってくる。でもご飯に困ったら戻ってくる。」

「いつでもどうぞ。」

リゼルは、会話しながらも目の前の料理をどんどん消していく。

最近会話に支障を出さない食べ方を習得したらしい。なんて無駄な技能だろうか。

数分もたたない内に料理はすべて彼女の胃袋に収まってしまった。

「……ん。じゃー、行ってくる！」

「いつてらっしゃい、リゼル。」

浮遊魔法を発動させて、リゼルは海上を飛んでいた。

「……ふう。めんどーくさいなー。」

彼女がいきなり何故、魔島の外に行くことになったか。それはある一通の手紙が原因だ。

「冒険者ギルド・システム一新に伴うライセンス更新手続き……ねえ」

その手紙に書かれていた内容を要約すると、こうなる。

・冒険者ギルドに、ギルドランクシステムを導入する事。

・それに伴い今までのライセンスを全て無効とし、その更新手続きを催促する旨。

そして、

・魔塔の関係者として大都市のギルド本部で魔塔のランク認定を手伝え。との事。

「ギルドかぁ……久しぶりだなー。お、陸だ。」

どうやらばやいている間に魔燈を抜け出し、大陸へ辿り着いたよう  
だ。

「よーっと。」

浮遊魔法を解除し、大陸へと降り立つリゼル。

かつて彼女が暮らしていたのは、このチネント大陸の南端付近にあ  
る小さな村だ。

「んで……大都市って何処らへんだっけ。」

しかし、今回の目的地は、大陸の中心にある大都市、トレンラック。  
冒険者ギルドの本部がある大陸一の街である……のだが

「……だめだ、思い出せないなあ。2、3回は行っただけ  
ど……。」

やはり、彼女はあまり訪れたことは無い様で、加えて十年も魔島に  
籠っていたら、その位置など覚えていられなかつた。

「トラスに聞いとけばよかったかな……あ。」

「そだよ、今聞けばいいんだ。」

何か閃いた様子で、おもむろに左手を前に出し、中指の付け根には  
められた銀環を見つめる。

そして、口元へ近づけ、指輪へ囁きかけるように呟いた。

『古の理を導き、彼方の先を映し出せ。』

その言葉と共に銀環は光り輝き、その輪大きさをリゼルの身の丈程にまで広げる。

描く真円の中に一つの景色を映し出し、その景色の中の人物は、笑みを浮かべこう言った。

「あ、リゼル。……やっぱり、迷っちゃった？」

「わかってたなら地図くらい渡しやがれー！」

両手を大きく上下に動かしながら怒るリゼルに対し、トラスはそれを楽しそうに笑いながら言い訳を始める。

「ごめんごめん。一応地図、あることにはあるけど、

古いものだから渡しづらかったんだよ。それでもいいならあるよ？」

「んう……古いのかー。それでもいいからちよーだい。」

「じゃあこれ、はい。大都市の位置なんて変わるものでもないだろうし、

多分、目的地さえわかればなんとかなるよ。最終的には。」

「じゃ、また何かあったら連絡する。……『あるべき景色へ還れ』。

」

銀環を通して地図を受け取ったりリゼルは、最後にトラスをちょっとだけ睨むと、

魔術を解除する言葉を囁いた。

「ふむふむ……よし、とりあえずあっちにいく！」

地図を軽く見て進行方向を定めたりゼルは、歌を口ずさみながらゆつくりと歩みを進めていった。

その後を付け狙う気配には、気づかないまま…。

### 53 ある旅立ちの日（後書き）

更新間隔は以前よりも落ちます。

まだあんまり慣れてないのでちょっとふらふら。

54 盗賊団と風の鳥（前書き）

9 / 13 表現・誤字等を訂正

## 54 盗賊団と風の鳥

「んー……このペースだと結構時間かかるなあ。」

リュックから出した携帯食料をかじりながら焚き火に薪を足しながら呟くりゼル。

勿論、大陸の端から中心まで徒歩のみで移動する訳ではない。地図に乗っている最寄りの村から交通手段を得ようとしているのだが、

「まだ結構遠いなあ。なんか美味しい物売ってるといいんだけど。」

既に3日歩き続けてようやく半分の距離を進んだに過ぎない。

食料はトラスが供給している為心配無いが、

最近ごろごろしていたリゼルにとってはひたすら面倒くさい旅だった。

慣れた手つきで火を調整し、地面に転がり目を閉じ、意識を手放す。その直前、

彼女の本能が体を動かした。

銀閃。

軽い金属音と共に火花が散り、投擲用の短剣は地面に落ちる。

「危なっ……」

「ちっ、勘の良い奴だな。」

短剣の主であろう人間が姿を表し、その手に持つカッタスが月光を反射する。

「……いきなり何すんのさ。狙われる事した覚えは無いけど？」

「珍しそうな物を持ってたみたいだからな。命が惜しければ指輪と荷物を置いていきな。」

「盗賊かー。悪いけど、抵抗しまくるからね。」  
「それは残念だ。」

交渉決裂と共に闇に紛れていた盗賊たちが姿を表す。  
数は八。円のような陣形でリゼルの退路を絶っている。

リゼルは視線を動かしそれらを確認し、近寄られる前に攻撃へ移る。

「数を以て滅せよ。『マジカル・ブラスター』」

反応する間の無い短縮詠唱。彼女の周囲に百個もの魔法弾が待機状態で生成される。

その迫力に退く盗賊達。それをいいことにリゼルはさらに詠唱を始める。

「無限の赤、その中にて燃ゆる――」

「お、お頭っ！」

「怯むな！詠唱を止めさせろ！」

リーダー格の男の号令により一斉に突撃する盗賊達。

魔法弾はそれを阻むようにリゼルを中心に旋回を始め、その役割を防壁へと変える。

「全てを焼き焦がせ。『ブレイクフレア』！」

「ぐあっ!？」

詠唱完了と共に地面へ足元へ投げつけられる円環。  
大地へ向けて起きる爆発が周囲の盗賊を吹き飛ばし、リゼル自身をも上空へ舞い上げる。

「降り注げー!」

旋回を止め、次々と撃ち出されていく魔法弾。

盗賊たちが立ち上がる間もなく、雨のように襲い来る無数の光。  
その中、一人の男が叫ぶ。

「『ライトニングピアス』っ!」

「チェンジっ!」

空中にあったリゼルの姿は消え、電撃は残された円環だけを撃ちぬく。

咄嗟の回避に成功したりゼルは状況確認の為距離を取り直す。

「簡単に行くと思ったらまた不意打ち狙いだったのか……。」

「チツ……。お前ら、こいつを全力で潰すぞ。」

それを合図にリーダーを含め盗賊全員が詠唱を開始する。

先程の爆風によって陣形はかなり崩れているが、誰もダメージを負っている様子はない。

一瞬戸惑うものの、リゼルはすぐに次の手を打った。

「爆ぜよ、『フォールフレア』！」  
「―盾となれ！『シールド』！」

上空へむけて放たれる巨大な火炎弾は轟音と共に爆散し無数の炎となる。

リーダーの男が予め詠唱していた防御魔法を上へ放つが、障壁の範囲からもれた炎が草花へと引火していく。

「無茶苦茶しやがる！『バブルスプレッド』！野郎共、さっさとやれ！」

「『『アースピア』！』『』」

ほとんど慌てる様子もなくリーダーが消火、詠唱を終えた手下達が魔法を発動させる。

鋭利な岩がリゼルの足元より襲いかかる。  
彼女は大きく跳躍して回避するが、残りの盗賊は既に空中に照準を合わせていた。

「『『フリーズロック』！』『』」  
「『マジックシールド』っ！」

4つの氷塊と障壁の衝突。僅かに抵抗するも、障壁は崩壊し氷の礫が容赦なく彼女の体を打ち据える。

墜落したりゼルへ近づき首にその曲刀をあてがうリーダーの男。

「すぐには殺さねえ。手こずらせた分たっぷり礼をしてやるさ」

「うぐ……」

「そうだな、ま――」

突如、声が途切れる。

男の体はいつの間にか上空へと打ち上げられており、共に空中で渦巻く砂埃は、それが風の仕業であることを示していた。

男は魔術を行使して軟着陸し、状況の確認をする。リゼルへ回復薬をダバダバとかける鳥人の男の姿。それから導きだされる答えは、援軍。

鳥人へ武器を向け、睨みつける。

「ちつ……だれだてめえ。」

「魔剣士のオルグだ。爆発が見えたから来てみれば……救援要請だったか。」

「爆発だあ？……ちつ、小娘が！」

悪態を吐きつつもカットラスを構え警戒し続ける男。

一方オルグは腰のレイピアに手を添えることもせず、ただ男を見据えたまま口を開く

「貴様ら、退く気は無いか？私に害の無い今ならまだ見逃せるが？」  
「無理な話だ。ここで逃しちゃ面子に関わる。ナメられたら終わりなんだよ！」

オルグがため息を吐き、一言だけ呟く。

「そうか。」

レイピアを抜き、軽く素振りする。

ただ、それだけの動作。

男が気付いたときには、部下は全て倒れていた。

「なっ!？」

「終わりだ。」

空気の塊が容赦なく男の意識を奪い取る。

あまりにも呆気ない終わり。圧倒的すぎる力。

「さて、……大丈夫か？」

オルグはレイピアを鞘に収め、リゼルの方を見やる。

彼女は回復薬で傷こそ塞がっているものの、失血がひどい様で焦点が定まっていない。

「助かった、ありがと。でも、ごめん。……無理。」

“風使い”オルグは意識を手放したりゼルを両手で抱え上げ、その姿を空へと消した。

## 54 盗賊団と風の鳥（後書き）

あいかわらす戦闘描写がひどい。

## 55 星空の洞窟（前書き）

1ヶ月ぶりの更新となつてしまい申し訳ありません。  
スランプ気味ですが、頑張つて更新します。  
息抜きに近い将来短編などを書くかもしれません。

## 55 星空の洞窟

宿屋の一室。

木製の簡素なベッドに横たわるリゼル。

彼女は僅かなうめき声を漏らし、目を開ける。

隣で本を読んでいた鳥人、オルグは目を覚ましたりゼルに気がつく  
と、頬を挟んで本を閉じ、立ち上がる。

「目が覚めたか」

リゼルは襲い来る空腹を堪え、記憶を辿る。

最後に見た光景は、無数の風と、自分の傍にいる鳥人の姿。

「あ。えーと……助けくれたんだよね、ありがとう」

「どういたしまして。私は冒険者のオルグだ。」

「オルグさん ね、了解。私はリゼル、たぶん冒険者？」

「多分ってなんだ……ひとまず、動けるか？」

「んー……大丈夫みたい」

軽く手足を動かし、魔力を流して動作を確認した後、答える。

直後、下に食堂があるから何か食べながら話そう。というオルグの  
提案に

全力で答えるようにアクロバティックに起き上がり、完全に回復し  
ている事を証明したりゼルだった。

「君は、なんというか……とても、食欲旺盛だな……」

「もぐもぐ……はれれふ。はおれへははら、ほらはふいへるんへふ。」

「返事は飲み込んでからでいい……。それより、君はどこへ向かっていたんだい？ 気絶していたようだから、一番近い村に運ばせてもらったが。」

リゼルは七枚目の大皿を積み上げ、今度はしっかりと料理を飲み込んで答える。

「大都市トレンラックに向かってる。もぐもぐ……。ん。地図が古くて不安だったからありがたもぐもぐ……」

「……。まあ、あそこまでは遠いし、街道を通らないと危険だろう。といつてもこのへんには無いか」

「そかー……もぐもぐ」

「……。」

この宿屋「森の泉」の食堂は確かに人気がある。美味しいというのも

あるが、それでいて「量が多い」のだ。

食べ盛りの若者が一皿で満足するといわれる各種ランチ（特盛）を次々と消していくリゼルは周囲の注目を集めまくっていた。あまりに美味しそうにして食べるため周囲の客もつられて追加注文し、途中で挫折しかけている姿が幾つも見られ、女将さんも苦笑していたそう。

「ふー。おいしかったー。」

十五枚目の皿を積み上げ、水を飲み、げふー。と満足そうに漏らすリゼル。

食べ終わった様子を見計らってか、オルグが立ち上がる。

「……さて、君はどうするんだ？ 私はこれから探索にいかねければならないのだが。」

「探索？」

「このあたりにある観光用になっていた洞窟に魔物が住み着いたらしくてな。」

「ふむふむ、なるほど。んじゃ、たすけてくれてありがとね！」

そう言いながら握手をしようとするリゼルだったが、オルグは話を続ける。

「話を最後まで聞いてくれ。君は大都市に向かっているのだろう？」

私もこの依頼が終わったら戻るつもりだ。終わり次第送っていかうと思うのだが。」

え？と声を漏らしながら彼女は思考を巡らせる。

やはり、借りは少ない方が好ましいが、大都市へ辿りつける確立が上がる以上、二つ返事で辞退するのはあまりよろしくない。十数秒悩んだのち、彼女は口を開いた。

「地図も曖昧だったしありがたいんだけど。それじゃオルグさんにわるいから、その依頼手伝うよ！中堅くらいの実力はあるつもりだし！」

「……しかし、昨日の様子を見る限り――

「何日も携帯食料しか食べてなくて……」

暗に「美味しいものを食べないと力がでない」というリゼルの言葉。実際に今の彼女は昨晚に比べて元氣に見えなくもない。

量も少なく栄養価も高くない携帯食料で数日過ごしていたのだから、仕方ない事でもあるが、彼女の食欲も相まって異様な程の説得力を発揮する。

「……まあ、言われてみればいきなり単独で挑むのも危険だな」

オルグは腰のポーチからライセンスカードを取り出して見せる。カードの真ん中には大きく「A」と書かれている。

「改めて、Aランク魔法剣士、『風使い』オルグだ。宜しく頼む」「円環使いのリゼルです、よろしく！……あ、まだライセンス更新してないんだけど大丈夫かな……。」

リゼルがずいぶんと古っぽいライセンスカードを取り出し、オルグ

のライセンスにぶつける。

「……あちゃー、やっぱりだめか……」

「まあ仕方ないな、リスト登録は大都市についてからでいいだろう」

このリスト登録とは、冒険者同士の繋がりの深める為の機能であり、登録されている人間とライセンスを通しての連絡や臨時パーティー等を組むことが出来る為、冒険者がギルドに登録するメリットの一つとなっている。

「そうだね。暗くなる前に帰ってきたいし」

「では、行こうか。」

「ここが、星空の洞窟……」

天井、壁、地面のあちこちに光る小さな水晶片。それらは僅かながら発光しており、暗闇の洞窟内をうっすらと照らす。それはまさに

夜空を歩いているようで、幻想的な光景だった。

「これなら灯りが無くとも進むめそうだが、戦闘になると危険だな」  
「うん。……光の粒よ、集いて浮かべ。『ルミナスファイア』」

呪文と共に光る球体がりゼルの手から浮かび上がり、四つに分裂。  
四方へ散らばり辺りを照す。見通しの良くなった洞窟だったが、魔物の影は無い。

「この洞窟ってどれくらい深いの？」

「話によると、ゆっくり歩いて1時間らしい。足元に注意しながら進むぞ」

「りょーかい」

「む」

「お？」

二人の声が洞窟内に反響する。

これまで魔物に気付かれないよう静かに足を進めてきたが、その二人の前には、少し開けた空間。今までよりも明るく感じるそこには、天井に映る星空を反射し、自らも静かに光り続ける地底湖があった。肌に触れる洞窟特有の、湿っていて尚冷たい空気、そして限りなく続いてきた夜空の道の果てに広がる、神秘の世界。二人は、美しい光景に思わず見とれていた。

「すごい……けど……行き止まり？」

「……の、ようだな。最深部はこの地底湖だと聞いている」

十数秒たったところ、我に返ったりゼルが現状を確認する。

「魔物が既に洞窟から立ち去った、とか？」

「いや、入り口に見張りが居ただろう。まだこの中だと言っていたぞ」

「うーん……ここまで一本道だったしなあ」

「ふむ、見えなかった道があるかもしれないな。ならば」

オルグが腰のレイピアを抜き、刀身に手を添える。彼が目を閉じると、剣先を中心に風が渦巻き、球状に収束。そして、圧縮されていく。

「導きのそよ風よ、迷える我らのしるべとなれ」

ゆっくりと横に振られたレイピアの先から、柔らかな風が地面を伝って流れていく。

「今のは……精霊魔法？」

「ああ。風の精霊達には昔いつも世話になっている。この大陸に来る前からだな」

「この大陸って……外から来たの？」

「村や町を回るのが好きでね。ここに来て一年になる。」

「ふむふむ、むしろ私の先輩だね！」

「君も外から来たのか？おっと……どうやら、他の道は無いようだ」

風が吹き抜け、調査結果を告げる。

しかし、それは手詰まりを知らせるものでもあった。

「じゃあ、一体どこに……」  
「いままでが一本道ならば、この空洞になにか仕掛けがあるのだから」

二人は改めて辺りを見渡す。

4つの光球すべてが壁を照らすように移動するが、やはりそこには壁以外の物は無い。

と、そこでリゼルが何かを閃く。

「オルグさん、水中も調べてみない？」

その言葉を受けてオルグは思考を巡らせる。

「盲点だったな、試してみよう」

目をあわせてお互いにならずくと、それぞれが水中へ潜るために詠唱する。

「深き水の旅。たゆたう流れの中、我に生きる術を。『ライフ・オーシャン』」

「大気の抱擁、我等を護れ。『エア・シールド』」

リゼルを青い光が、オルグを風の膜がそれぞれ包み込み、水中での活動を可能とする。

二人はそのまま光る地底湖へと潜っていった。

「ぶはー！」

声を上げてリゼルが水面から顔を出す。  
先に上がっていたオルグが声をかける。

「どうだった？こっちは収穫なしだ」

「んとね、道っぽいもの見つけた。きてー」  
「わかった。」

先程と同じように風の膜に身を包み、水に潜る。  
リゼルの残っていた光球を目印に潜っていくと、壁に大きな穴が開いていた。

これまでの景色と一辺して、真っ暗な闇が続いていたる様は、とても不気味だ。

「これは……先に進んでみるしか無さそうだな」

「うん、気をつけていこう」

二人は、光球が照らす薄暗い横穴の中へと進んでいった。

## 55 星空の洞窟（後書き）

今までより多めの三千文字。

煮え切らない終わり方でごめんなさい。

感想、指摘等お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4904s/>

---

塔の番人リゼル

2011年10月20日20時01分発行